



2006.10

水辺のこゝろ

平成17年度「川に学ぶ」活動事例集



リバーフロント整備センター
財団法人 Riverfront Center
for Environmental Improvement and Recreation

この冊子は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。



はじめに

平成10年6月、河川審議会「川に学ぶ」小委員会より、「『川に学ぶ』社会をめざして」が提言され、「川に学ぶ」社会の実現を促進するために、さまざまな取り組みが始められました。

財団法人リバーフロント整備センターでは、平成11年度から市民団体等の方々が河川・海岸等の水辺で行う自然体験や環境教育等の活動に対し、助成する「川に学ぶ」活動助成事業を行っております。

平成17年度には、全国各地の市民団体・小学校等から、河川や水辺における、さまざまな環境教育に関する活動について、202件の応募をいただきました。そのうち、65団体の方々が、本事業を活用してさまざまな活動をされました。

この冊子はその活動状況を紹介させていただくものです。これが活動を実践されている方々の励みになるとともに、今後の多くの川に学ぶ活動の参考になれば幸いです。

なお、本冊子に記載されている河川名等は、地域・地区での呼称もあり、必ずしも管理者が定める名称ではありません。各団体から提出のあった活動報告書をもとにして記述しました。

同様に、活動目的・活動内容・活動の効果・反省点等についても、活動報告書を概ね原文のまま記載しています。

平成18年10月

目 次

1	馬木っ子ふるさと環境探偵団 島根県 大馬木川	27	NPO 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ 北海道 幌別来馬川
3	鴨川を美しくする会 京都府 鴨川	28	梓川・奈良井川 水辺の学校 長野県 梓川
5	野村町環境にやさしい里づくり協議会 愛媛県 黒瀬川	29	NPO ひがし大雪自然ガイドセンター 北海道 音更川
6	尾道市立木頃小学校 広島県 藤井川	31	余笹川流域連携ネットワーク 栃木県 余笹川
7	美浦村立美浦中学校 科学部 茨城県 霞ヶ浦	32	エコロジーネットワークOSAKA 大阪府 万博記念公園夢の池
9	町田川いやしとにぎわいづくりの会 佐賀県 町田川	33	安曇野市立豊科郷土博物館 長野県 屑川
11	大曲の水辺に夢をつくろう会 岩手県 北上川	34	三次市立青河小学校 広島県 小似川
13	香川淡水魚研究会 香川県 香東川	35	出羽乃国漂流隊 山形県 最上川
15	半田せせらぎ会 群馬県 利根川	37	袖ヶ浦市立中川小学校 千葉県 小櫃川
16	カエルフォーラム 山口県 錦川	38	北海道のカワシンジュガイを守る会 北海道 ベベルイ川
17	鴨と蛭の里づくりグループ 滋賀県 天野川	39	朝日町立五箇庄小学校 富山県 小川
19	香川の水辺を考える会 香川県 有明浜	41	川づくり・清瀬の会 東京都 柳瀬川
20	NPO 蕪栗ぬまっこくらぶ 宮城県 小山田川	42	NPO 五ヶ瀬自然学校 宮崎県 五ヶ瀬川
21	NPO 「水の国」しずおかフォーラム 静岡県 安倍川	43	小松市立粟津小学校 石川県 日用川
22	NPO ふるさと環境市民 神奈川県 目久尻川	45	梅津まちづくり委員会 京都府 有栖川
23	通船川・栗ノ木川ルネッサンス 新潟県 通船川	47	NPO エコプラザさばえ 福井県 河和田川
25	薩摩川内市立入来中学校 鹿児島県 樋脇川	48	箱根ジュニアエコクラブ 神奈川県 早川
		49	長岡市立東中学校 新潟県 信濃川

- | | | | |
|----|--------------------------|----|------------------------------|
| 51 | 和泉川東山の水辺愛護会
神奈川県 和泉川 | 77 | 長野ホタルの会
長野県 湯福川 |
| 53 | 狭山の副池自然づくりの会
大阪府 狭山副池 | 79 | 阿南市立椿小学校
徳島県 椿川 |
| 55 | せたがや野川の会
東京都 野川 | 81 | 宇陀かわびとの会
奈良県 宇田川 |
| 57 | 大谷幼稚園ふるさとクラブ
島根県 大谷川 | 83 | 南三陸町立志津川小学校
宮城県 八幡川 |
| 58 | 八女水の会
福岡県 矢部川 | 85 | NPO 流域調整室
京都府 木津川 |
| 59 | ヤマメクラブ
群馬県 雄川 | 86 | NPO 大淀川流域ネットワーク
宮崎県 大淀川 |
| 61 | 川西市情報教育研究会
兵庫県 猪名川 | 87 | 逆川を愛する会
茨城県 逆川 |
| 63 | でさきっずくらぶ
岡山県 出崎海岸 | 89 | 芦田川環境マネジメントセンター
広島県 芦田川 |
| 65 | 高松市立檀紙小学校
香川県 香東川 | 91 | 蒲都市立中央小学校
愛知県 落合川 |
| 66 | 草津塾
滋賀県 葉山川 | 93 | 自然と文化の森協会
兵庫県 猪名川 |
| 67 | 喜多見ポンポコ会議
東京都 野川 | 95 | 鈴鹿亀山生活創造圏ビジョン推進会議
三重県 鈴鹿川 |
| 69 | NPO 多摩川環境研究会
東京都 多摩川 | 96 | NPO 山の自然文化研究センター
岐阜県 高原川 |
| 71 | NPO 信州いわなの学校
長野県 神川 | 97 | すいすい倶楽部
広島県 沼田川 |
| 72 | 海老川の水をきれいにする会
千葉県 海老川 | | |
| 73 | 河和田自然に親しむ会
福井県 河和田川 | | |
| 74 | 富山県立有磯高等学校
富山県 仏生寺川 | | |
| 75 | 自然と暮らしを考える研究会
佐賀県 巖木川 | | |





川の生き物観察会

▼活動の目的

私たちの住むこの「馬木の里」も、少しずつですが変化しています。この変化を渡したいは見逃すことなく、よりより方向への変化に向かうよう自分たちにできることから活動を始めます。学校で学んだ環境学習をもとに、さらに自分で課題を見つけ、地球環境についても考えていく活動を大切にします。また、地域の大人の方へも、自分たちの活動結果を積極的に知らせ、地域の大人の方と一緒に活動を進めることができるよう努力します。エコクラブを設立することで、地域の中で環境を考え・大切にしていこうとする輪を広げ、地域の自然をみんなで見守っていけるよう呼びかけます。

▼活動の内容

年間活動計画に基づき、身近な自然の中へ出かけ、以下の体験的な活動を実施し、環境保全意識を高めるために活動を実施した。

- 河川水質調査
- 川遊び
- 水生生物観察会
- ホタル生息調査
- ホタル観察会
- 岩魚の飼育活動
- 河川環境美化活動
- 樹木観察会
- 環境保全呼びかけ
(チラシ制作、研究発表会)

活動に当たっては、学校での学習と関連を図った野外活動を中心として活動を組織している。



川の生き物観察会



馬木っ子祭り

▼活動の効果

2年間の取り組みの中で、こども達の日常生活の中に、川というフィールドが位置づけられつつあり、実際の活動を通して「川は楽しい」「川は気持ちいい」という思いを育てることができている。川に実際に入り、五感をつかって川を感じる体験を積みせると共に、科学的な手法も経験させる機会も設定することで、川への関心や知識を高めることに成果をあげている。

▼苦勞した点・反省点

組織結成2年目であるため、中心となる活動は昨年度と同じとして、実施内容を一部変更して実施した。今後は、中心活動内容を再検討し、より子ども達が河川を中心とする自然環境に親しめる活動を組織していきたいと考えている。また、サポート体制についても、さらに充実するように保護者への呼びかけを進めていきたいと考えている。



【第1ポイント 加茂大橋上流】 川に入り水生昆虫の採集をする子ども

▼活動の目的

京都市内の中心を北から南へと清らかに流れる鴨川。その鴨川も今から40年前には魚も住めない状況であったことを子どもたちに説明し、今の鴨川に生息する生き物たちや水質の状態を子どもたち自身で調査を行い生息する生き物の種類によって河川の状態が解る事を理解させ川の大切さを教える。

▼活動の内容

水質調査について（パックテスト）

- PH：ピーエッチ、水素イオン濃度、7が中性で数字が小さくなるほど酸性になり、数字が大きくなるとアルカリ性になり水が酸性かアルカリ性かを見る指標です。
- COD：科学的酸素消費量、水中の有機物の量の目安で多いほど水が汚れている指標です。
- NO₂：人間のし尿及び生活排水中の窒素の量をはかることでトイレからの排水量目安となる。水生昆虫類の調査カワラゲ、トビゲラ、サカマキガイ、ミズムシ、ヒル類等の調査



【第1ポイント 加茂大橋上流】
水生昆虫の採集をする子ども



【第2ポイント 三条大橋上流】
講師の説明を聞く子どもたち

▼活動の効果

今回の活動は当会が鴨川流域の小学校に河川環境学習を行っている小学校2校を対象に父兄同伴も可、と云う事で実施しました。

特に今年度は当会の活動が平成17年度文科省検定教科書 新編「新しい社会」5下と関係資料集にも広く紹介されたこともあり大いに効果があったと思われます。

▼苦勞した点・反省点

今回の活動は例年になく残暑厳しく事前に子どもたちには帽子と水筒を準備するように連絡し、救護の医師にも暑さに備えて頂くように連絡、又、賀茂大橋にては暑さのため急遽橋の下に移動するという事になり今後は活動時期の検討が必要と思われます。

尚、最近の鴨川では親水性のある川として親しまれ多数の方々が散策やジョギング等で混雑する時期もあり、それに備えて安全管理に対し準備と対応。

▼活動の目的

レスキュー講座で川の流域住民でも知らなかった、水圧等川の力学と水難事故への対処法の一つ、ロープワーク等レスキュー方法をビデオと実演で講義を受け、午後川に移動ロープを投げるタイミングなど実技指導と体験を通じ想像以上に水の怖さを確認意識したことが大きい。見学者の中に訓練とは理解しつつもロープワークが失敗、流されていく場面うるたえオロオロするなど緊迫緊張の講習で今後の安全活動に十分つながった。

▼活動の内容

地域の川の定点（例年行っている調査地点）の生物学的水質調査会の管理する公園内の人工河川にホタルの水辺づくり
米のとぎ汁の有効活用（排水として流さない）
環境問題に関する学習や講演会の開催
本年度は活動の資料として小冊子「川と川の生き物」を発行する
川の清掃や浄化活動



川の虫調べをし、水質判定を実施。

▼活動の効果

川の生物学的水質調査は肱川流域各地の公民館単位で、地域の環境グループを中心に小学生を対象に実施している。調査結果を検討し、日頃の生活態度が川をきれいにするにつながることを話し合うことにより、子どもを通じて、また、環境グループの地道な活動を通じて、地域全体の環境意識を高めることに貢献している。

事実、近年、徐々に水質が良くなっているようである。また、環境フェアでも例年会員の関わった小学生グループの活動報告などを行い成果を上げている。

▼苦勞した点・反省点

川の水質調査は3ヶ月前後が適当であるが、時期的に子どもが集まりにくい。



2グループに分かれて4ヶ所で水質検査。

▼活動の目的

4年生の総合的な学習の時間 テーマ「くらしをみつめよう ～木頃川を守る～」において、浄水場の見学や校区の環境を守る活動をされている公衛協の方の話聞き、水に関する環境の大切さに気づかせ、児童自らが課題を持ち環境を守るために自分たちでできることをつかませ、行動できる児童に育てる。

▼活動の内容

- 木頃川とわたし：学校の周りの環境に目を向けながら木頃川について関心をもち、学習のテーマについて考えていった。
- 浄水場見学：浄水場のしくみやはたらきについて調べるため、浄水場へ見学に行き、まとめていくことができた。
- 木頃川を探る：木頃川の中流・下流へ行き、川の様子を観察したり、水質検査を行ったりしていきながら、木頃川の状況に気づき、問題意識をもつことができた。
- クリーン作戦にレッツゴー！：自分たちが今できる取り組みを考え、木頃川中流のごみ拾いに出かけた。
- 発信！！：今まで学習した中から、学校や地域に発信していくテーマを決め新聞やポスターなどにまとめていく。

▼活動の効果

1月27日の参観日に、全校児童および保護者の前で、1年間の取り組みについて発表を行った。感想の中には、藤井川が少し汚れているということが分かり、また、ゴミもたくさん落ちていることに驚いた。みんなの藤井川をきれいな川にしていきたい。という声がたくさんあった。4年生では、藤井川の今の現状を知り、自分達がどんな行動を起していくべきなのかを考え、ポスターや新聞作りを始めている。藤井川をきれいにしていくための問題解決能力を身に付けることができた。

▼苦勞した点・反省点

発表の仕方についての学習をもう少し充実させていけばよかった。いろいろな発表の方法を知り、それらを試していく時間も必要であると考えた。



藤井川（中上流区間）：尾道市WebSite



【大塚川河口付近調査】DO測定センサー



【ろ過】浮遊物量を測定。

▼活動の目的

水の汚れの原因の一つとして水中に漂う浮遊物の影響が大きい。霞ヶ浦では、波が大きい時は湖底の泥が水の動きに乗って巻き上げられ水中を浮遊するが、波がなくても白っぽい浮遊物が観察される。そこで、このような浮遊物がなくなれば水は透明になり、水質がよくなると考えた。また、浮遊物は常に存在することから、その正体を探ろうと考え次のねらいを設定した。

霞ヶ浦の浮遊物は何か、及び、浮遊物を取り除くことで水はきれいになるかどうかを調べる。

水質の変化する要因の一つとして考えられる窒素・りんを、スチールウールや菌類を利用して除去する装置を作成し、ろ材を工夫して水質浄化の研究を行う。

さらにこの活動を通して、生徒の科学的な資質の向上を目指している。

▼活動の内容

霞ヶ浦の美浦村沿岸部2地点を定期的に水質調査、浮遊物の調査を行った。

霞ヶ浦の浮遊物は何かを調べた。また、予備実験から決定した霞ヶ浦2地点の水質と、浮遊物の質量を定期的に調べた。さらに、浮遊物を取り除くと水質はどのように変化するかを調べた。

浮遊物に金属（鉄、アルミ、亜鉛）が含まれているかどうか調べた。

浄化装置をペットボトルで作し、ろ材を工夫することによってりんや窒素の浄化を試みた。

研究発表会や、茨城県体験学習発表コンクールで研究発表を行った。



▼活動の効果

活動を通じた感動

水中を漂う浮遊物を取り除けば水はきれいになると予想していたが、意外にもなかなかきれいにならないことが分かった。また、浮遊物には金属も含まれているなど、水中での物質の反応は複雑なのではないかという自然の不思議さに触れた。

生徒の学習態度の形成

生徒の感想の中に、「先輩が引退したあとになって自分がこれからリードしていくこと、先輩がいなくなった後も、今までの経験を生かしてこれからもがんばりたい。」と、力強い言葉があった。また、浮遊物への関心が高まっていて「もしかしたら浮遊物の体積した湖底の土にも金属は含まれているかもしれない。」とこれからの活動への意欲が高まっている。このように、研究内容に関する成果ばかりでなく、1人1人の生徒の精神的な成長、及び、学習意欲が高まったり、科学的に考える力（科学的な資質）が身に付いてくる等の学習面へ波及するというような成果も見られた。

▼苦勞した点・反省点

濃度変化の計測では、授業の合間や休日に測定するなど、連続できるように工夫した。

水質調査地点の決定と浮遊物調査方法は、予備実験をしっかりと行い決定した。

調査をするにつれて膨大なデータをどうまとめるか、どのように分析するか苦勞した。

参加者の人数が増えたため、車の手配が不十分になり、調査に行く際、みんなで自転車で出かけたこともあった。メンブレンフィルターとパックテストをたくさん使ったため、予算の確保に苦勞した。

浮遊物をろ過する際、フィルターが目詰まりを起こすため、何度も交換しなければならない。そのため、水をろ過するための時間が予想以上に要した。



【水質浄化システムの作成と設置】

▼活動の目的

昔は多くの人で賑わいを見せ、地域の憩いの場だった町田川の水質が年々悪くなっています。川はゴミや生活排水によって汚く淀み魚達も居場所を無くしています。そんな悲惨な姿と化しつつある町田川を、賑わいを見せていた頃のきれいな姿に戻し、子供達や地域の皆さんが親水性を感じられる川にする事を目的としています。

▼活動の内容

- 4月～6月：会員による川の実態調査並びに清掃活動。川のウォークラリーの準備
- 7月 16日：第1回町田川ウォークラリーの実施。参加人数40名（小中高生、お年寄、産官学民の参加）川の実態調査（水質・生物・ゴミ調査）。手作りの水質浄化システムの製作と設置。ワークショップによる川のマップ作成。
- 9月 17日：第2回町田川ウォークラリーの実施。参加人数20名（小中高生、お年寄、産官学民の参加）川の実態調査（水質・生物・ゴミ調査）。水質浄化システムの製作と設置。ワークショップによる川のマップ作成。



【町田川ウォークラリー】
長松大橋～アルピノ



【見つけたテナガエビ】

▼活動の効果

- 川の実態調査をウォークラリーを通じ楽しくでき、参加者が実体験から川への関心を高めた。
- ウォークラリーの後ワークショップで作成した手作りマップをもとに町田川地図を作成、地域に情報を発信できた。
- 排水溝から川へ流れ込む場所に手作りの水質浄化システムの製作、設置は、川の自然再生への地域住民としての係わりの必要性を学ぶことができ、会として次年度も継続する意向を確認できた。
- 地域の産業文化祭での活動報告、また地元の老人会の集いでの川環境への取り組みを会として講演する機会を頂いた。佐賀県水環境フェアにて活動報告を実施した。

▼苦勞した点・反省点

- 当初計画していた2回の川のウォークラリーのうち、8月が天候不良のため、9月に延期となり、準備、案内のやり直しに苦勞した。また子供達の参加が減り残念であった。
- 当初講師を依頼していた大学の専門の先生が都合つかず、地域でコーディネーターをされている方に急遽、講師を依頼し、無事ワークショップが完了した。





▼活動の目的

北上川の水辺環境を守りながら取り組んで来た子供達との川舟を使った体験学習と、本年三回目になる『川まつり』『手こぎレース』を安全且つたのしく行なうためと、この機会に地域特に地元消防団員に体験させ防災意識の高揚を図りつつ、一方カサリン・アイオン台風の甚大な被害を風化させないため、当時の新聞記事等写真等資料を掲示併せて今後予想される大雨時の浸水予想図、加えて町よりの情報伝達方法を告知し、地域が一体となった防災体制の確立の一助となればの企画。又、業者の協力をいただき災害時に備えての保存食料、防災用具の陳列展示コーナーを設置地域に紹介し万が一に備えさせる。

▼活動の内容

- レスキュー座学：午前9時～12時
川での各種用語と意味・水圧・ロープワーク・現場管理・目撃者や見物人の対応方法・デフェンシブ スイミングポジション・レスキューの基本的な考え方・レスキューの15の原則・結論。
- レスキュー実施：陸上でロープの投げ方（二人一組で6組～8組で）。ゴムボートの操作方法・遭難者の救助訓練二人一組で。北上川中中州に舟で移動、ロープワークを実体験、流される人、ロープを投げる人、で座学を実地に体験。
- 災害関係展示：カサリン・アイオン台風被害を報じる、当時の新聞と惨状撮影の写真・町よりの情報伝達等40点提示。外、非常食保存飲料水展示。



▼活動の効果

レスキュー講座で川の流域住民でも知らなかった、水圧等川の力学と水難事故への対処法の一つ、ロープワーク等レスキュー方法をビデオと実演で講義を受け、午後川に移動ロープを投げるタイミングなど実技指導と体験を通じ想像以上に水の怖さを確認意識したことが大きい。見学者の中に訓練とは理解しつつもロープワークが失敗、流されていく場面にうろたえオロオロするなど緊迫緊張の講習で今後の安全活動に十分つながった。

▼苦勞した点・反省点

まず、初企画のため準備に特に安全に進行するために不安と心配の連続でした。そして、実技で川に入る人の人選に心配したが消防団員が積極的に引き受けてくれ（15人）結果的に順調に終了できた。この種の講習は、一過性に終わらずに繰り返し訓練研修が必須である。一方、展示会は地域の要望により一週間の開催としたが、近年の豪雨災害を事例にフォーラムを開催すれば尚防災意識の高揚になったかと反省をしています。



【ロープの使い方の講義】



【ロープワーク】



【水質調査の様子】

▼活動の目的

河川に対する理解を深め、豊かで潤いのある水環境を考えていくことを目的に化学的ならびに生物学的な見地に立った河川調査を行います。あわせて、子ども達に、身近な生き物が観察できる生態観察水路を整備し、学習環境を提供します。

▼活動の内容

水質調査、水生生物調査を軸とする河川調査を行いました。河川調査で得た知見をもとに地域住民を対象として観察会を実施しました。観察会においては、一般からの幅広い参加を呼びかけました。あわせて、河川近隣に設置されている生態観察水路を整備し、子ども達が身近な場所に棲む生き物と親しめる空間を創出しました。



【生物調査の様子】



【生態観察水路】

▼活動の効果

一時期、工場排水や生活雑排水などの影響で水質汚染が進み、ゴミなどの投棄が増え、それとあいまって水路のコンクリート三面張りが始まり、人々の関心は、生き物の生活空間という視点で、河川や水路から離れ、そのことは現在も同じであると考えられます。

本活動によって、生き物の生活空間としての河川・水路を見直し、人と生き物が共存できる環境づくり、昨今大きな議論的となっている外来種問題の意識啓発・高揚に寄与することができました。

また、参加した子ども達においては、生態観察水路でのメダカやモロコ類などの在来淡水魚類、水生昆虫の観察を通して、生物への関心を深め、環境教育・理科教育の面において効果を上げることができました。

▼苦勞した点・反省点

観察会において効果的な周知・告知などの広報面で苦勞しました。観察会という機会のみで、水辺に対する理解を深めてもらうのではなく、整備した生態観察水路ならびに附属施設での掲示等を工夫し、常に地域住民に対して普及啓発ができるように取り組みました。



【生態観察水路での学習会】



【蛍の幼虫を放流】

▼活動の目的

小川に生息する小動物や水生植物等の生態系の連鎖を学習するとともに、若い子供たちから高齢者の人々までの世代を超えた交流が出来る機会を提供し、地域の連帯を目指す。

▼活動の内容

小川の維持管理と継続的な活動の基幹とし、草花を主とした環境整備を行う。また、蛍が飛び交う小川にする事を目標にして、卵の孵化・カワニナの繁殖・幼虫の放流を行う。

▼活動の効果

行事の有無にかかわらず毎月第一日曜日を現地集会の日と定めて、地域の多くの人々が集まった。関心の高い「蛍」をテーマにしたことにより、動植物の全てが関連している生態系の実体の一部を学習することができた。

▼苦勞した点・反省点

会員の意思統一が難しく、純粋な自然環境を目指す考え方と、整備された綺麗な環境を目指す考え方との整合が困難であった。また、「蛍」に関しては幼虫を購入して放流したけれど、自然に発生することを目標にして環境を整えるようにしたい。





【パネル展示】



【トンネルの観察会】

▼活動の目的

身近に棲んでいるカエルと、コウモリの観察で自然のしくみや環境の変化を体で感じてもらうこと。
動物の世代を継ぐしくみ、性について、人間も含めそのすばらしさを知ってもらうこと。
親子で、錦川流域で体験学習をして、見分を深めてもらうこと。

▼活動の内容

錦川流域での生態形調査、モリアオガエル、ニホンユビナガコウモリの個体数調査
バットディテクターに使うこもりの飛翔追跡、モリアオの卵塊調査
小学校、中学校、地域コミュニティでの講演会、各種イベントへの参加啓蒙活動

▼活動の効果

私たちの生活する地域に、大切な生き物、コウモリや、カエルが生息していることを知ってもらった。
コウモリの生息地であるトンネルや、カエルの生息の為に水環境が最も重要であると認識して頂いた。
2006年の山口県内の環境共生ネットワークの引受けの基礎となった。

▼苦労した点・反省点

当初は300名を越える参加者を見込んでいたが、台風後の大雨、大荒れの天候の為、野外のメン観察、川辺での観察中止、トンネル観察のみとなった。天候の予測が難しかった。
その為、県内の参加が少なく、今後の課題となった。



【天の川の分水施設の学習と付近の水生物調査】

▼活動の目的

私たちの旧山東町（現米原市）は「鴨と蛍のまち」というキャッチフレーズを町の観光活動の中心にしています。この活動の基礎的な調査や研究は私たちのグループが行っています。しかし、ここ10年ほど調査研究費を町が支給してくれません。そこで調査や研究が特定の少数の人の負担になってしまいます。さらに、その熱心さもだんだん鈍って来ています。そのうえ、調査の範囲が水鳥や蛍からだんだん広くなりため池・河川・ハリヨ・湿原などと自然環境全体に及ぶようになりました。そして、その成果は町市県におよび、環境保全への提言・工事等のアドバイスにより大きく地域に貢献しています。今後この活動をさらに進めたいと考えています。

▼活動の内容

ゲンジボタル・ヘイケボタル・ヒメボタルの発生状況調査（4月～8月）
蛍の発生する環境調査（発生する場所が変化するため）
本年よりヒメボタル（山地）、クロマドボタル（湿地）の発生状況調査（7月～8月）
町内ため池（23ヶ所）及び周辺河川の水鳥飛来状況調査（各月1回）
黒田川浚渫後のモニタリング（水生生物）2年目（12月8ヶ所）
高齢者「環境と健康」講座の指導
年10回（各回約120名参加（4月～1月））
県主催「水すまし事業」の川の生物調査の指導（年4回）



採集した水生生物を種類ごとに入れ水生生物による水質判定を行っているところ。

▼活動の効果

ホタルの調査：ホタル発生環境の改善、町民への環境保全啓発、小中学生の総合学習の指導などに役立った。

「さんとうぼたる祭り」の期日決定、ホタル鑑賞地の決定などは毎年幼虫上陸調査により私たちのアドバイスにより決められている。

「ため池及び付近の河川調査」は本年滋賀県主催の「ため池里山人のにぎわい in しが」で口分田が基調講演を行い「川に学ぶ」大切さを訴え多大の成果を挙げた（1月21日）

川の浚渫廃土で切田池を埋め立てる計画があったが、ため池の調査から切田池の重要性を説明し埋め立てを中止させた。

▼苦勞した点・反省点

ホタルの調査は夜間であり、しかも降雨の激しい夜がよいのでたいへん苦勞している。また一人で数カ所の調査である。（活動の写真は撮れない）

ため池も危険を伴うので、本年は口分田一人で行った。

黒田川浚渫後の2年目のモニタリングは専門的な知識が必要であるので口分田が行った。これらの調査研究はグループの研究紀要「鴨と蛭とサギソウのまち」第17集に掲載する。（5月下旬発売予定）

▼活動の目的

有明浜は、昨年の台風による高潮被害で砂浜や市が天然記念物に指定している海浜植物に甚大な被害が出ました。

浜辺の回復状況を海浜植物の観察調査で資料を作り、徐々に回復する様子を、地域の子ども達も参加して調べ、自然の大切さを体験を通して学んでもらう。

▼活動の内容

- 2kmの海岸を5ポイントで堤防から波打ち際に向かって海浜植物の自生地を計る。
- 昨年の台風で、削り取られた自生地での芽生えの状態を調査する。
- 地域の学校活動を支援。海浜植物の名前、特徴、植生、生態を解説する。



【海浜植物の観察】

▼活動の効果

- 被害にあう前に、自生地を共有していたものの中でも、回復の早いもの（スナビキソウ）、遅いもの（コウボウムギ）があり、砂中での根茎の生態の相違を知ることができた。
- 子ども達が、長い時間を経て、美しい風景を作るのも自然だが、それを一夜にして無惨な姿に変えるのも自然の力であることを実感し、自然の大切さを体験活動で学んだ。

▼苦勞した点・反省点

有明浜は、国立公園と一部、名勝琴弾公園に含まれるため、活動によっては、いろんな規制で自由にできない。行政や関係各所の許可が必要になる。



▼活動の目的

一級河川小山田川水系と、国土交通省によって遊水池として整備されている蕪栗沼の周辺地域の小中学校に川や沼の環境教育を定着させることを目的とします。教職員向けパンフレットを制作し、渡り鳥の観察や水生生物の観察など授業のメニューを提示します。生き物展示会を通じ教職員と子供に川の自然や環境に対する興味をもたせます。

▼活動の内容

蕪栗沼を活用した環境教育を紹介するパンフレットを制作し、地域の小中学校の教師に配布しました。川や沼の生き物（魚や水生昆虫、プランクトン）を学校の理科室に展示して観察や講義を行う出前講座を、近隣の小学校で実施しました。教職員と子供に川の自然に対する興味を持たせ、沼に飛来する渡り鳥の学習授業や、水辺の生きもの観察授業などを実施することができました。

▼活動の効果

学校で、総合学習や理科の授業の中で、環境教育を取り組むきっかけでき、また生き物出前講座が発展し、実際にフィールドに出て、水辺の生きもの観察授業や、渡り鳥の学習授業を行うことができました。また地域の人々は、子供たちの学習をニュースや新聞で見たり、子供たちの話を聞くことで、川や沼に興味を持ち、守っていききたいと思うようになりました。

▼苦勞した点・反省点

学校によっては、説明が不十分だったこともあり、授業の趣旨に賛同してくれなかったり、出前授業がイベントで終わってしまい、その後の授業に生かされなかったりしました。パンフレットと同時並行でホームページを開設したことは、苦勞は大きかったものの効果も大きく、授業に積極的に利用してもらえました。

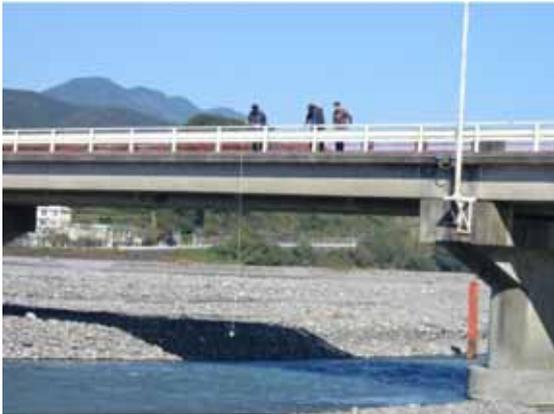


【水辺の生きもの観察】



▼活動の目的

平成16年の初夏から秋にかけて相次ぎ大雨が降り、安倍川本流では白濁現象がアユつりシーズンをとおして発生した。本活動はNPO会員、静岡大学と東海大学学生、地元住民が協力して、安倍川で発生する濁りの原因を調べ、多様な生物が棲める清流維持のために必要な基礎的資料を得ることを目的とする。

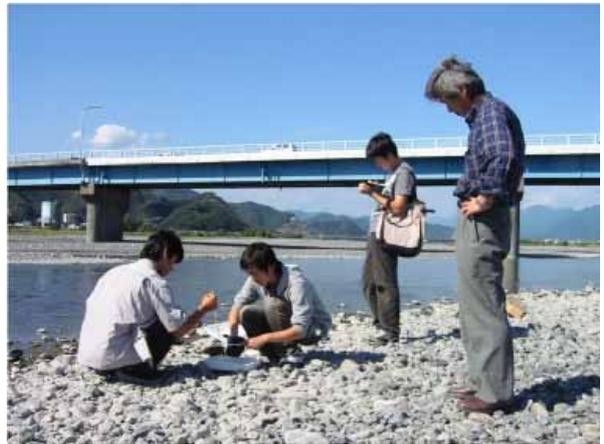


【安倍川での資料採取】

【水質検査】

▼活動の内容

安倍川の濁り発生原因となる可能性が高い西日影沢と蓬沢を重点的に現地調査した。調査は、崩壊現場やその下流域での流出土砂の性質と濁り発生の関係を調べた。また、増水や濁りによって生息数が変化し、アユのエサとなる珪藻類の生息状況と水質調査もあわせて行った。昨年度の調査結果と本年度の活動で得られた結果を合わせて11月20日の第3回流木クリーンまつりでパネル展示し、参加者に説明した。1月30日の静岡大学フィールド科学実地演習発表会で水質と珪藻類の生息状況を報告した。



▼活動の効果

自然とのふれあい体験が無いまま大学に入学する学生が多いが、農業や林業の基本となる自然、特に水資源に関連する理解を高める上で極めて有効であった。上流部では崩落や侵食が続く地質学的には活動的な安倍川と、その濁りの実態を流木クリーンまつりでの展示を通じて一般参加者に伝えることが出来た。調査活動の結果、安倍川本流で生じる白濁現象は、大雨で風化した頁岩を含む斜面が崩壊し、本流を流れ下る過程でもその成分が溶出して生じるものと推定できた。

▼苦勞した点・反省点

平成17年は一転して少雨で異常渇水となり、昨年発生した安倍川本流における長期にわたる濁り現象は発生せず、当初計画した濁りの経時的な変化がとらえることができなかった。また、例年より1ヶ月も早く、安倍奥は相当量の降雪があり、12月上旬以降は低温が続き路面や沢が凍結し、源流部の調査が困難になった。日照りと渇水のため珪藻類（水あか）も腐った状態が続き、増水や濁りとの関係を明らかに出来なかった。



【水辺の環境教室】



【環境教室】

▼活動の目的

地域を流れる川を中心に川の原状、生態、歴史や文化を知り、ふるさとを再発見し郷土愛や環境意識の啓発を図る。又異世代間の交流により地域を愛し、アイデンティティーを育てる。具体的な行動により川を美しくする。

▼活動の内容

川の清掃
川のウォッチング：水質検査、植物
環境学習：水辺の環境教室
流域の団体とのネットワーク

▼活動の効果

- 川を注目し、かかわることによりふるさとへの愛着が高まり、具体的に川が美しく清らかになることで達成感が得られた。
- いろいろな学習を重ねることで、川の大切さや、昔から果たしてきた役割に気づき、歴史や文化を見直すきっかけとなった。
- 川は生きものや植物の宝庫だと気づき、大切に思うようになった。

▼苦勞した点・反省点

- 関心を持ってもらい多くの人に参加してもらうための方法が、もっとインパクトのあるものにしたかった。（市広報、タウン誌、ちらし）
- 参加者全員に情報をフィードバックする手段がないため、次回へのモチベーションを高めることが難しい。Z

通船川 栗ノ木川ルネッサンス



【水質検査】

▼活動の目的

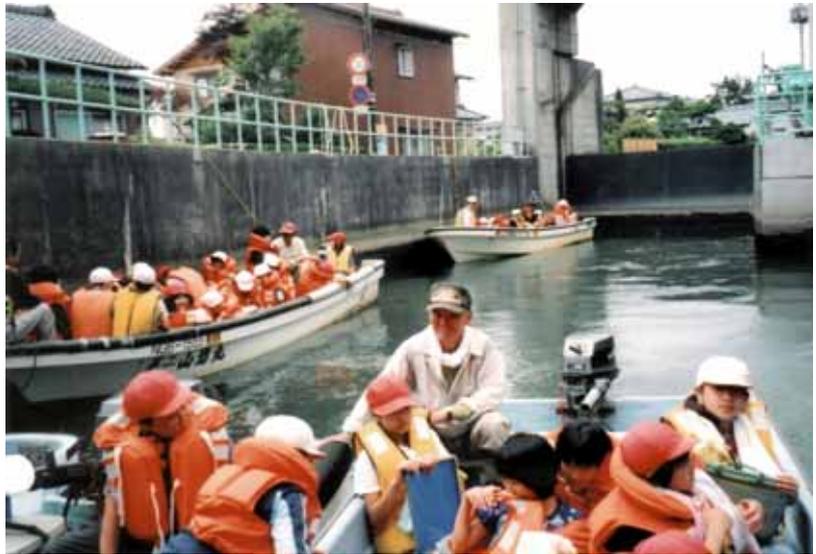
川から学ぶ「子ども環境会議」は、川は、そこに暮らす人々にしかない地域の様々な歴史があり地域の伝統文化を通して生活学（地域学）がありました。しかし、高度経済優先社会がもたらした生活環境の変化に伴い地域の自然環境は失われ、先人から伝えられた地域学の一部に「子どもは地域の目で育む」の習慣も失われました。「子ども環境会議」は、複数校が身近な環境をテーマに住民が生活の知恵として伝えた歴史・自然環境・地域文化等（地域学）の再生を計り、持続可能な学校と地域を結ぶコミュニティの創出を計り、安心・安全な地域社会の構築を目指しています。

▼活動の内容

校区内の川は全国でも有数な汚い・臭い・危険な汚染河川（通船川、栗ノ木川）から「身近な環境」をテーマに住民参加型で体験型総合学習（小学校）をおこない、子どもの目線で発見した宝物や環境汚染の実態を「子ども環境会議」のなかで大人（家族等）に発信し関心を高める。



調べたことは表にしました。



閘門を体験。

▼活動の効果

子どもたちは、活動を通して

- 川に捨てられた「ゴミ」の多くはリサイクルが出来ることを発見した。
- 水の汚染は我が家の排水にも注意する。(油はふき取ってから洗う)
- 子ども達が調べた情報を聞き、住民は、かつての川を思い出し協力的になった。
- 住民からの川への情報が増えコミュニケーションが構築された。
- 学校では「スクールサポーター教室」を設け、児童と住民の意見交換の場が出来た。

▼苦勞した点・反省点

複数校が取り組んだ「子ども環境会議」は、始め、各校の競争学と受けとられ、先生から反論があり実現が不可能に近かったが、ある学校の先生の元同僚であった関係で話しがまとまった。

しかし、会議の際、先生方が出席しやすくボランティアでなく出張扱いにするため公民館長から校長に依頼文を出してもらい認められた。

派生店、公民館長の依頼文書手続きの説得に苦勞した。



「水性生物による水質調査」

▼活動の目的

町の中央を横切り、学校の脇を流れる身近な樋脇川の水質・生物調査を行うことで、観察の方法や視点、器具や薬品の使い方のスキルを身につけさせたい。また、実際に観察や生物を捕獲することで関心を高めると共に、水槽や池で飼育することも合わせてその生態を詳しく知る手がかりとしたい。そして、清掃活動を兼ねたゴミ調査を行うことにより、現状を知ると共に環境を大切にすると共に地域やそこに住む生物を慈しむ心を養いたい。さらに、これらを報告することで他の生徒や地域の方々にも同様な意識付けをしていきたい。

▼活動の内容

下記の事について、定期的に継続して調査を行った。

樋脇川の状態：幅、深さ、流れの速さ、川底の状態など

水質：透明度、におい、温度、PH、ORP、電導率、COD、NO₂、リン酸

生物：種類、数、場所など

飼育：捕獲した生物を水槽や池で飼育、観察

ゴミ：数や量、種類など

清掃活動：で調査し記録をとったものを集め分別処理

地域との活動：地域で行われる川を中心とする行事、活動への参加、援助

報告：県の委託の水生物による水質調査、子供エコクラブへの壁新聞提出、文化祭の発表や調査結果の掲示



地域のお年寄りから昔ながらの網を使った鮎の追い込み漁を詳しく教えていただく。

▼活動の効果

- 自然の変化を調べるため、事前調査として、お年寄りなどに昔の川の様子、生物の捕獲の方法などをインタビューによる交流ができた。
- 川を中心とする清掃活動を兼ねた清掃活動による環境への意識が高まった。
- 調査・研究したことを文化祭や壁新聞の作成と掲示による研究の報告することにより、他の生徒の環境への意識も高まった。
- 市・県の環境関係・河川局やエコクラブなどの環境団体へ活動・調査報告ができた。
- 調査の方法や器具、薬品の使い方、飼育などのスキルが高まった。

▼苦勞した点・反省点

- 30名の生徒に対して指導者が少なく、十分な対応ができないこともあった。
- 普通は選択理科の授業で活動したが、準備や後始末、行き帰りの時間の関係もあり1時間の授業の中では観察・調査の時間が限られたり、十分なまとめや考察ができないことが多かった。
- ほとんど同じ場所だったので上・下流域のもっと広い範囲や近隣の他の川での調査・観察も行い、その結果を比較する活動も行ったかった。

文化祭の展示





【フィールドワーク】 水生生物生息調査活動



【実習】 同定作業に難航

▼活動の目的

水生生物の概要と生態について、実際のフィールドに出て実物を観察することで理解を深める。

水生生物の採取により、幌別川の水質や河川の状態を把握する。

上記を通じて、鉾山地区の自然知識の深度化と技術を習得する。

また、学んだことをガイドとして実際にどのように伝えるか企画づくりを行い、行動へつなげる足がかりとする。

▼活動の内容

1日目

水生生物の概要と生態

水生生物採取および水質調査

(pH値の測定)

採取種整理・種の同定作業と指標水生生物

による水質の判定

こうもりの観察

(捕食活動から見る河川の生態系)

2日目

1日目に学んだことを素材にプログラムづくり(グループ作業)

作成したプログラムをグループ毎に実演し、共有を図る。

▼活動の効果

- 専門家による質の高い情報提供より、水生生物(特に水生昆虫)について参加者の理解が深まり、寡占を使った自然体験やガイディングとして十分に活用し得る知識を得られた。
- 今後、指標生物採取などによる水質調査を継続的に行なうためにも、水性生物の調査手法について技術を習得することができた。また、今回の講座を機に、定期的な水質調査などへの取り組みを行なう担い手が誕生した。
- 指標生物などの採取により、幌別来馬川(鉾山地区)の水質、河川環境について把握することができた。

▼苦勞した点・反省点

- より精度の高い状況把握をするためにも多様な科学的データ(たとえばBOD・COD値など)の測定などが行えなかった。今後実験機材なども充実させ、情報を蓄積していきたい。
- 2日目のプログラムの演習は時間が少なかったため、十分には発表する時間が取れなかった。
- 水生生物を採取する方法など、現地で様々な手法が提案されたので、急遽備品などの購入が必要となった。



▼活動の目的

梓川は源を槍ヶ岳に発し、上高地を経て流れ下る名川の一つである。しかし、沿岸地区の関心が薄く、梓川に係わる団体や活動は少ない。この観察会では水性生物の実態調査と水質など河川の諸要因との関係を調べ河川環境の意識を高めることを目的としています。

▼活動の内容

高い位置（土手）から川全体を見渡し、川に関わる名称や川の形態を知る。

川の諸要因と水生生物との関係を水中メガネ等を使ってみる。

採集生物を分類し生物化学的判定法（資料）によって川の清汚を調べ梓川の認識を深める。

川周辺の動植物（トンボ、鳥、川原植物）にも目を向け、川との関係をみる。

基本的水質検査方法（pH測定、水温、気温等）を知る。

▼活動の効果

公民館関係者は今回の観察会の詳細（写真等使って）を広報に取り上げ、川に関する諸活動のきっかけとしたいと今後の活動に意欲を現していました。（9月号）

参加者は川は唯々危険なところと思っていたが、正しい行動をすれば極めて楽しいところであり、又水が大切なものであることを知り、今後も川に親しみ大切にしていこうという発言が多数ありました。

▼苦勞した点・反省点

水中メガネ、ルーベなど一回の買い物で目的の数が揃わず、イベント終了後にとどいたり、買いそびれてしまった。その為、一部活動内容が変わったところもあり残念だった。

当初6月12日を予定していたが、同じ場所近くで他の市主催の催しがありやむなく8月6日に延期した。この為夏休中で家庭の計画があり、参加できなかった、夏休み以外の土、日にやってほしかったという意見が数件あった。



音更川（幌加地域）でのオショロコマ釣り

▼活動の目的

大雪山国立公園が面積の7割を占める上士幌町。その中を流れる山岳溪流にはオショロコマ（カラフトイワナ）が生息し、良質の水質が保たれています。今回この活動において、地元の小規模複式校の高学年を対象にオショロコマの生態調査とその生息地である河川の環境調査を行い、その生態の特徴と河川をとりまく環境との生態的なつながりに気づきを得られるように指導を行い、河川を取り巻く生態系をつなぐをオショロコマを通して理解することを目的としています。また、自分の暮らす地域の自然資源の価値を理解できるように促すことも目的としています。



▼活動の内容

1. オショロコマを捕まえよう

現地にて集合した後、川での活動の注意事項の説明。川に入って魚を捕まえるための方法を指導。実際に川に入り、オショロコマの観察と様々な方法で捕獲を試みる。捕まえたオショロコマを観察すると同時にどのような川の物理的環境で捕まえられたのかを確認させる。捕まえた魚を次回の学習に活かすために持ち帰り終了

2. オショロコマを調べよう

前回の学習で捕まえたオショロコマを活かしてワークシートを用い、オショロコマの体や生態の特徴を調べ学習しました。ワークシートの1・3・5を中心に行い、3・5ではオショロコマという魚についての知識学習、1では外見の特徴とその意味、そして食性を調べることで生態についての理解を高めました。

3. オショロコマをまとめよう

前回使用したワークシートを用いてオショロコマの暮らす場所の物理的特徴を考えました。

▼活動の効果

参加した児童にとって釣りの体験や川で遊ぶ体験を提供できたことは、地元の自然の中で遊ぶことの楽しさを、素晴らしさを知るよい機会となった。

川に暮らす魚が予想以上に陸生落下昆虫を捕食している事実を目の当たりにして、川の周りにおける自然環境がとても大事であることへのきづきを与えられた。

よく釣れるポイントの指導つながりで、川の物理的形狀としての「瀬」「淵」の関係とそれがどうして出来るのかということが理解できた。

「淵」を好んでオショロコマが暮らす（よく釣れた）事実から淵がない河川はオショロコマにとって致命的な物理的環境であることを理解してもらえた。

魚が暮らすためには、水質、河川の物理的環境、周辺環境の生態的なつながりそれらが十分に機能していないといけないという事が理解できた。

雨天で2回中止となったが小規模複式校同士による合同学習の機会を提供でき、児童間の交流も生まれた。

自然豊かな地域、そして小規模校ならではの理科学習プログラムとして学校から評価を得られた。

地元の河川がかなり良質であり、もし今後河川開発が行なわれたらどのような可能性があるか考えられる下地を児童が持つ事ができた。

当初予定に無かった地元中学校の理科学習に「オショロコマの調べ学習」の要望が発生した。時間的都合もあり のオショロコマの生態学習を中心として行なった。

▼苦勞した点・反省点

天候の影響を受け予定日中止 延期となるケースが2回発生したため、学校カリキュラムとの調整が難航した

2校については日程的余裕が無くなり、 の実体験を重視したため の調べ学習が1回しか出来なかった。



▼活動の目的

平成10年8月末の豪雨で被災した余笹川等は、4年という短期間に河川環境が一変した。このため、各河川の代表箇所における瀬・淵等の物理的環境の変化、植生の回復、魚類の把握と個体数等の生態系の変化を定期的、継続的に調査する。併せて、地域の住民を対象にした「川の日記念事業」やウォーク、河川の清掃活動等を行い、河川に対する理解を深め愛着心を育む。



【水生生物調査】 指導員のアドバイスを受けながら、調査を行う宇都宮大学生。

▼活動の内容

- 7/19(土)：川の日記念事業としてマスのつかみ取り、地元「郷土の河川の環境と生態系を愛する会」と連携し、黒田原小学校の5、6年の児童を対象とした鮎の友釣り体験や投網の実演、建設機械・消防車の体験私情を行った。(参加者約300名)
- 8/27(土)：これまで継続して行っている余笹川等3河川の物理的環境変化、植生回復状況、魚類生態に加えて水質調査を実施した。(参加者60名)
- 9/25(日)：「よささウォーク2005」5km、10km、20km。歩きながら余笹川の持つ貴重な自然環境を体験してもらい、河川に対する理解を深めてもらう。併せて会員による清掃活動を実施した。(参加者約200名)

▼活動の効果

- マスのつかみ取りに参加した幼稚園児達は、余笹川の豊かな水と緑のオープンスペースの中で、水と魚にふれあい自然体験を満喫した。
- 鮎の友釣りに参加した小学生は、釣りの楽しさを体験すると共に、鮎の生態(縄張り等)を学習し、釣りや投網という昔ながらの漁法を学んだ。
- 環境調査に参加した会員は、河川の持つ多様性や植生の回復力を学んだ。
- 地元住民と一体となっていく活動により、良好な河川環境の保全等に対する住民の意識が着実に定着しつつある。

▼苦勞した点・反省点

- 川の日記念事業については、梅雨期開催のため、参加人数が天候によって左右される。友釣り体験参加者の確保は学校の協力が必要である。来年度はさらに、川遊びの楽しさを体験できるメニューを検討したい。
- 今年度から新たに環境学習指導者の指導を受けてパックテストによる水質調査を行ったが、事前の予備学習が必要であった。
- 「よささウォーク2005」については、荒天のため参加人数は少なかったが、昨年に引き続き那須町の九尾祭りと同様開催としたため定着してきた。地元河川愛護会の人達の湯茶等の心のこもった接待に感謝した。



完成した葦舟の乗船会



▼活動の目的

葦は水質悪化の原因となる窒素やリンなどを吸収して成長し、1本の葦で1年間で2千リットルの水の浄化作用があり、環境強制の水生植物です。この葦の群落を守るためには、大人も子ども達も「一緒に作り育む」といったコミュニケーションを通して、楽しみながら、葦や水資源への価値観を共有する活動を目的とします。

▼活動の内容

淀川（高槻市鶴殿）で刈り取った葦により、淀川河川公園にて、葦舟の基礎となる船体を子供達と製作しました。その船体を平成17年11月12日（土）、13日（日）に開催されました「環境フェスティバル21」に出展し、12日に障害者施設の人達と仕上げ、13日に万博公園の夢の池にて完成した葦舟乗船会を行いました。

▼活動の効果

会場を訪れた人や、出展者からの質問は「中まで全部葦ですか」「本当に浮くんですか?」「どこの葦ですか?」「何日くらいでできるのですか?」と言うのが主な所。制作した葦舟を池に浮かべる時、歓喜の声が聞かれ親子で楽しんで頂きました。

▼苦勞した点・反省点

完成した葦舟は3人乗りで160kgとなり、水を含むと200kgをこえる重量なので、移動に関して大人10人くらいの人数が要り、苦勞しました。



班別にわかれ、それぞれの専門家の先生に説明を受けながら再度研究テーマを確認。



「岩石班」は、ただの石ころが、実は何種類にも分かれていて、それぞれ特徴がある事を発見。

▼活動の目的

「河」をテーマに、地域の自然や歴史に関心を持ってもらうきっかけづくりとする。又、その情報を社会に向けて発信する。

▼活動の内容

豊科町内を流れる屑川周辺を、地元中高年の講師と歩き、岩石・鳥類・水生昆虫・植物・歴史などについて調査し、研究発表を豊科町郷土博物館で行った。

▼活動の効果

身近な自然・歴史について、意外な発見をしたり、学校の授業では出来ない体験が出来、地域を見直す事ができた。

▼苦勞した点・反省点

準備期間が短く、講師や生徒たちとの日程調整が困難であった。

▼活動の目的

ホタルの生態や水生昆虫などを調べることで、身近な自然環境に関心を持たせる。環境保全に取り組むことの大切さを、自分たちができることから体験的に学ばせる。身近な自然環境の豊かさや多様性に気づくことにより、地域を愛し、その自然を大切にしていこうとする心情を育てる。

▼活動の内容

「ホタル」を採集し、産卵から幼虫段階まで、その成長を調べた。
 指標生物を採集して、身近な川の水質判定を行なった。
 パックテストを行って河川の水質調査を行なった。
 竹炭を作って川に沈め、川の水質浄化を行なった。



川の水質浄化のため、川底に竹炭を沈めているところ。

▼活動の効果

「ホタル」の生態を調べることを通して自然の不思議さに触れ、生物の成長についての認識が深まると共に、小さな命が地域の環境問題と深く関わっていることに気づくことができた。
 指標生物やパックテストによる水質判定を通して、地域の川の水質を守ろうとする思いを育てることができた。
 地域の方々と共に竹炭による川の水質浄化に取り組んだことにより、身近な自然環境を守るものの大切さについて、地域全体に発信することができた。

▼苦勞した点・反省点

夜間のホタル観察や採集。
 卵から幼虫段階までのホタルの管理と記録。
 気象や川の水量を考慮した活動日の設定。



【救助訓練】スローロープを用いた訓練

▼活動の目的

「カヌー」や「川遊び」を通して自然とふれあい、一人でも多くの方に、最上川を始めとする川の魅力の再発見と自然に対する畏敬や大切さを再認識していただくことを目的とする。また、河川における重大事故の発生を未然に防止し、さらに「安全な川遊び」ができる子供たちで「賑わう川辺」が実現できればと考えています。

▼活動の内容

「ながい水まつり」にタイアップし、中高生を対象とした救助訓練やカヌー川下りを、また小学生・幼児を対象としたカヌー体験試乗会を行った。また、地元子供会の要請により、置賜白川（最上川支流）において小学生及び保護者を対象とした「川遊びカヌー教室」を実施。ライフジャケット泳、自然観察、カヌー体験等を行なった。



竹いかだづくりと自然観察



▼活動の効果

- 救助訓練では身近にあるもの（ペットボトル等）やスローロープを用いた訓練を行い中高生を中心とした次世代「川の指導者」育成のきっかけを作った。（今後も継続した訓練等を予定しています。）
- 「ながい水まつり」や「川遊びカヌー教室」に於いて、参加者からは更なる発展を期待されています。また、その様子は「山形新聞」や「広報ながい」等にも掲載され、多方面から多くの反響を呼んでいます。

▼苦勞した点・反省点

- 天候に恵まれ、炎天下でのイベントとなったため、参加者の体調管理に気を配った。
- 竹いかだと一緒に川下りを行なったため、時間調整が困難であった。
- 幼児用のPFD（ライフジャケット）を用意すべきである。
- 今後、日程調整及び広報活動等について検討する必要がある。

▼活動の目的

小櫃川中流域に位置し、常に川の流れを見渡すことのできる本校では、総合的な学習や理科の学習を通して、「小櫃川を調べる」活動を行うことにより、小櫃川やそれを取り巻く自然環境の素晴らしさを知ると共に、小櫃川やその流域の自然環境を大切にす児童を育てる。

▼活動の内容

- 川の流れの変遷を調べる。
- 水質調査を行う
- 川に生息する水生昆虫や魚類の調査を行う
- 学習発表会を開催する
- 川の清掃活動をする。



▼活動の効果

- 児童は、いつも見慣れている小櫃川のすばらしさに感動し、積極的に調べる活動に取り組んだ。それにより、学校や家庭での会話の中に川やそれを取り巻く自然についての話が出るようになり、川や自然に対する意識が高まった。
- この活動を保護者や地域の方々に広めることにより、その方々の川や自然に対する関心が高まり、いろいろな資料の提供や活動に対する援助を得ることができた。

▼苦勞した点・反省点

- 小櫃川の歴史や生息する魚類や昆虫、水生動物等に詳しい専門家や資料を探すのが大変であった。
- 小櫃川の上流域や下流域の小学校との共同研究を実施したかったが、各学校の研究が違っていたり、予定が合わなかったりして実施できなかった。来年度は、是非実施したい。

▼活動の目的

身近な自然や地域の自然を再発見しようをテーマ。清流にしか生息できない「カワシンジュガイ」の生息調査と、生きものがそこで生活するには、それぞれ自分に合った環境がなければなりません。私たちが住んでいる地域の河川で棲息している生きものを観察することによって、水の汚れ具合や川の周りの状態など、地域の自然を知ることがねらいです。

▼活動の内容

身近な自然、ふるさと再発見のための「自然のしらべ」をおこなう。
川岸にすむ水生生物や魚類を捕獲し調査。
パックテスト及び水質調査。
地元の年配者より昔にいた水性生物のお話の聞き取り調査。
2年毎に調査を実施し、報告書を作成する。各学校や関係部署に配布。



たくさんの水生生物の採集。

▼活動の効果

カワゲラ・ヘビトンボ・カゲロウなどの水生昆虫が棲んでいました。中流部分も水はきれいで、ヤマトゲラ・ヒラタドロムシ・カワニナが生息し、下流で人家に近いところでは空き缶・雑誌や新聞紙・生ごみ・ビニールなどが落ちていて、水はやや濁っていて、生物の種類も少なく、ミズムシなどが見られました。参加者全員でゴミ拾い、自分たちの住んでいる身近な川をきれいにしよう。川にゴミを捨てない事に決意いたしました。

▼苦労した点・反省点

川の上流部分は、水が澄んでいても「カワシンジュガイ」は3日前に台風が通り過ぎたため、当初の調査場所の川の水位が上がっていたのと、流れが早くなっていたので、流れのゆるやかな場所を探すのに苦労致しました。又、現地調査（2ヶ月前・1ヶ月前・2週間前・1週間前・3日前）計5回の現地調査を致しましたが、アクシデントの為、調査場所の変更による移動に時間がかかりすぎた。次回は3ヶ所位の候補地を決めるなどの反省がありました。



冬の川歩き。上流から下流までの水温調査

▼活動の目的

富山県の小学校教育研究会の理科研究の指定校であり、子どもたちは川魚や水生生物への関心が高まっている。近くに小川という地域のシンボリックな川があるため、川で遊んだり、魚や生物を実際に採取するなど、子どもにとって川が身近に感じると共に、自然や理科への関心を高める。

▼活動の内容

- 川でのカヌー遊び
- クロメダカ、トミヨ、ドジョウ類の生息調査
- 冬の川歩き。上流から下流までの水温調査



クロメダカ、トミヨ、ドジョウ類の生息調査など

▼活動の効果

- 子どもにとっては川は遊びが無限に広がる遊び場であり、自分たちの近くにあった川が今まで以上に身近な存在となった。また、今まで気にかけていなかった魚など生物の存在を実感し、クロメダカを繁殖させ川に帰すなど、生命が育む場としての意識が高まった。
- 地域がこれまでやってこられた酒の孵化活動や、釣り大会、サケの遡上見学などへの子どもたちの参加が増え、親子で川の活動へ参加するようになった。また、ライフジャケットの購入により、大人も子どもと安心して川で遊べるようになった。

▼苦勞した点・反省点

- 理科の研究や運動会の練習など行事が集中し、夏のよい時期での活動のタイミングを逃した。
- 降雨や気象状況により、川の水量や流れが刻々と変化し、水量が少なく魚などの観察に向く状態の川へ出かける日の設定に苦勞した。
- 安全のために少ない人数に分けて川に連れて行ったが、大人のサポートをたくさん確保し、異学年の子どもたちと一緒に川にかかわる活動を今後は行っていきたい。

▼活動の目的

- 生態系を守り育てる多自然型川づくり。
- 子供達が「ふる里の川」として親しめる川づくり。
- 河畔林を守り育て、多様な生物が生息する川づくり。
- 出来るだけ多くの子供達に川のおもしろさを体験させる。

▼活動の内容

- 清瀬橋（柳瀬川）付近の合流工事に関する行政への提言。
- 川の水質検査などをして安心して川遊びが出来る川にする。
- 工事に関して自然の河畔林を守り、生物の生息出来る水際創成の要望。
- 水質、魚、生きもの定点調査と総合学習での指導。
- 河床の帰化植物（オオブタクサ等）の刈り取りと清掃。



水質、魚、生きもの定点調査とまとめ

▼活動の効果

- 水質が良くなり安心して子供達が川で遊べるし、又魚とりをして、魚の種類、生息状況で水質が良くなった事を知る。
- 島谷幸宏先生の講演と現地見学で、皮の工事に対する提言が出来、多少工事の変更が出来るようになりました。
- 子供達が積極的に川あそびや、清掃に参加するようになりました。

▼苦勞した点・反省点

- 国土交通省治水課、東京都河川局計画課、北多摩北部建設事務所に出向き、あきらめず交渉、提案をし、ご指示を受けたことです。（環境に配慮した改修をして頂くためにはエネルギーがいります。）

▼活動の目的

五ヶ瀬川の上流域に暮らす子どもたちに、身近にある川を利用して、専門的知識を持った指導者の下、遊び、学ぶ事で、川の大切さ・素晴らしさを発見し、郷土を愛する心・誇りを育てる。

▼活動の内容

PFD（ライフジャケット）を着用し、準備体操。2班に分かれてもらい、1班はカヌー教室。パドルの漕ぎ方、降艇の仕方、バランスの取り方などのレッスン後、緩やかな流れの中で実践練習。もう1班は、リバーレスキュー。浅瀬の歩き方、流れの中での流され方・泳ぎ方、救助ロープを使ったレスキュー法などを練習して、最後にリバートレッキング（川を上流に歩き上がっていく）。途中で班を交替する。



リバーレスキュー。浅瀬の歩き方、流れの中での流され方・泳ぎ方、救助ロープを使ったレスキューを練習

▼活動の効果

子どもたちが、カヌーを使って川で遊んだり、実際に川の中に飛び込んで水に触れる事で、川の現状を身を持って体感する事ができた。それにより、今後の、より良い川づくりやまちづくりの現状を身を持って体感する事ができた。それにより、今後の、より良い川づくりやまちづくりに寄与する事が期待できる。また、地域の大人たちも、川で遊ぶ子どもたちの姿を見て、川への関心が深まると思われる。

▼苦勞した点・反省点

梅雨が長引いたために、天候不順で予定日に出来ず延期する学校もあり、日程の調整に苦勞した。また、水温が低いため、ウエットスーツを着て体温低下を防いだり、河原で焚き火などをして暖をとれるようにする必要があった。



日用川探検

▼活動の目的

日用川の上流は、サンショウウオ・サワガニ等清流にしか生息しない生き物が数多くみられる。しかし、中流、下流と下るにつれ藻が繁殖し、生息する生き物も様変わりする。過去に汚れワースト2といわれた木場潟へと続く日用川及び粟津川の水質・生物調査を行い、汚れの原因を探ると共に、今後の自分たちの生活のあり方を考えたい。

▼活動の内容

日用川上流・中流・下流、それぞれの地点に生息する水生生物を調べ、川の汚れ方から、生息動物が変化していることを調べた。ゴミの量を知るとともに、検査薬等を用いて汚れの原因や藻が増える原因を知ること、自分達の生活にフィードバックし、自分たちにできることを考え、家庭や地域に呼びかけた。また、自分たちにできることとして、木場潟のヨシ刈りなどの活動にも参加した。



日用川上中流探検



木場潟を美しくする会・田中先生を招いた勉強会

▼活動の効果

川探検をすることにより、清流にしか生息できない生物を発見し、自分たちの住む「粟津の自然環境のすばらしさ」に気づくとともに、自分たちが出す生活排水でその美しい川を汚していることを身をもって知ることができた。そのことにより、「川をきれいにしたい」という意識が芽生え、「自分達にできることは何か」を考え、少しでも川を汚さないためにできることを各家庭や地域に呼びかけることができた。日常生活が優先されなかなか実践できないでいる人達も、子ども達の呼びかけを通して、生活廃水に関心を持ち、できることから少しずつ取り組んで下さったようである。

▼苦勞した点・反省点

日用川上流は、本校から約4kmあり、交通手段として自転車を使うため、安全確保などの面で保護者の協力をいただいた。もっと時間をかけて川探検をしたいと思うが、往復だけでも時間と労力を要するため、難しかった。木場潟へも同じ理由で、2学期中に行けなかったのが残念であった。限られた時間で、生物をさがし、水質検査をするのは難しく、水質検査が後日になったのが少々残念であった。



水質調査・生き物調査

▼活動の目的

1. 有栖川の環境モニタリング
 - パックテストによる水質調査を行ない子ども達に身近な環境を調べる面白さを知ってもらうこと。
 - 学区内を流れる有栖川の現状を知り関心をもってもらうこと。
2. 身近な川を知り、川に学び、川を守ることの大切さを学ぶ
 - 川の中の生き物について楽しく遊びながら学ぶこと。
 - また瀬や深みでの恐さを味わうなど自然体験を通して、川の多面的性を学ぶこと。
 - 川に親しみ、川を守ることの大切さを学ぶこと。
3. 学校、地域、家庭が連携して、子供たちとのふれあい、協働の場づくりを提供
 - 学校、地域、家庭が連携して親と子供、子ども達どうしがふれあう場づくりを提供すること。
 - 環境マップをみんなで協力しながら作る喜びを知ること。

▼活動の内容

- 小学生の低学年から高学年と保護者が一緒に有栖川の環境モニタリングを実施。内要は昨年同様に水質と魚介類、底生動物、水生植物。
- 川に入る諸注意とあわせて外来種（ブルーギル、アメリカザリガニなど）の問題について説明し、その後アンケートを実施。
- PH、COD、亜硝酸性窒素のパックテストと透視度、臭いなどの水質状況の調査を実施。
- 4班に分かれて川に入り、タモ網などにより魚や甲殻類、石や岩に付着している昆虫などの採集を約1時間実施。捕獲漁具としてモンドリや投網による採取も行う。
- 班ごとに見つけた生き物を図鑑などで調べたり聞いたりして有栖川の環境マップ作りを行う。マップにはパックテストの結果なども整理しまとめ、発表を行なう。



魚や甲殻類、石や岩に付着している昆虫などの採集

▼活動の効果

地域と学校、P T A が連携して子ども達と一緒に「川に学ぶ」体験活動は、環境への関心を高める学習の場、楽しく子供たちとふれあえる場となった。また今年で4年目となった本取り組みは学校やP T Aの間でも認知度が上がり、積極的な協力が得られた。

▼苦勞した点・反省点

- 小学校低学年から高学年までたくさんの参加と楽しく飽きないプログラムの工夫。その一環としてラミネートフィルムによる押し花づくりを計画したが時間が足りなく実施できなかった。
- 夏の盛夏、低学年の子どもたちが多いため休憩時間も設けながらプログラムを進める点に苦勞した。
- 時期的に自然観察の行事が多く、指導の先生との日程調整が難航した。



生物（魚類・水生昆虫）捕獲・採取調査、パケットテスト及び生物学的水質判定による水質調査

▼活動の目的

鯖江市内の身近な水辺の調査を小中学生と共に行い、評価する。このことにより身近な自然の原状を把握し、今後どのようにすればよいかをみんなで考える材料とする。

身近な自然調査を継続し、経年変化を小中学校の総合学習の資料として利用できるようにする。

▼活動の内容

- 水辺にすむ生物（魚類・水生昆虫）を捕獲・採取して調査する。
- パケットテスト及び生物学的水質判定による水質調査を行う。
- 地元住民より昔の自然等についての聞き取り調査を行う。
- 昔と今の自然の違いについて評価し、問題点を探る。
- 記録を保存し経年変化を見る

▼活動の効果

- 大きな環境の変化は見られなかったものの、継続してデータを取り続けることで、将来大きな成果となって来る。自分達が住む場所の自然環境について、よりいっそう興味を持つことができた。
- 水質調査は生物学的水質判定法によるものとCODパケットテストの2通りを行い、同様な結果であった。今後これは学校での環境学習に活かせればと考えている。
- 聞き取り調査により、ゲンジボタルの生息地河和田川の自然環境変化を知ることが出来、今後どのようにすれば自然が護られていくかの参考になった。

▼苦勞した点・反省点

- 参加人数が講師の数の割りに多かった。参加者の保護者たちには、子供と一緒に観察をして頂く予定だったが、安全面の協力（見張り等）をお願いすることとなった。
- 暑かったので参加者やその保護者、講師及びスタッフが大変だった。



子どもたち数人で川の中を観察中

▼活動の目的

箱根の玄関、湯元駅前から眺められる早川は、河岸も河床もコンクリートで固められ、生き物がいるようには見えない。しかし、川に入ってみると、水生昆虫はまだ、棲息している。

箱根に住む子どもたちには、温泉街を流れるこの川にも、トビゲラ、カワゲラ、カゲロウなどの幼虫がいて、汚れた水を浄化し、魚や野鳥を育てていることを、ぜひ知ってもらいたい。

▼活動の内容

自然公園指導員の指導を受けて、箱根・早川の中流域、湯本で水生昆虫を採集、観察し、箱根町立「森のふれあい館」館長に採集した水生昆虫を同定してもらった。その結果から、生物学的水質を判定した。毎年、同じ時期に実施して経年変化を記録している。

中流域（早川の集水域）をスギ植林から広葉樹林化を目指し、ブナ、ミズナラ等の実生を育て植樹した。

▼活動の効果

エコクラブの観察地点は箱根の玄関口、湯本駅の真下である。観光客は、川に入っている子どもたちを見て、箱根には、まだ子どもたちが遊べるような川がある、と認識を新たにされたかもしれない。

同じく駅前には、箱根町庁舎がある。今年で6回目となるこの催しには町長や、環境課が関心を寄せてくれている。今年は、町のホームページにエコクラブの活動を載せることができた。

クラブの会員の一中学生は、学校のクラブ活動で箱根の河川、4地点で水質検査をしている。彼は、友人3人と夏休みの自由研究で、水質検査地点に棲息する水生昆虫について調査し、発表した。

▼苦勞した点・反省点

町では莫大な費用をかけて、下水浄化施設を建設した。しかし、国立公園内とはいえ、一企業が十数棟ものリゾートマンションを建設し、温泉施設は限りなく増え続けている。そして河川はコンクリートで固められていく。箱根をつらなく早川の状況は、よくなってはいない。

子どもたちにどう話せばいいのか。何をしよう、と呼びかければいいのか、苦慮している。



信濃川でのフィールドワーク・生き物調査

▼活動の目的

信濃川や雪を中心とする郷土長岡に関する調査や体験学習を通して地域の環境を深く理解し、地域のよりよい環境作りに積極的に関わろうとする生徒の育成。



中州の植物調査（外来種や絶滅危惧種など）

▼活動の内容

- 信濃川とその土手の野外観察（植物・鳥類・昆虫・史跡）
- 信濃川とその支流での水質調査
- 信濃川とその支流での川遊び
- 信濃川土手の清掃活動
- 信濃川河川事務所・NPO信濃川学校主催者・長岡市環境課・長岡市水道局職員の講話
- ライマン長岡（柿川排水機場・松葉排水ポンプ）県立歴史博物館・雪氷防災研究所・長岡市消流雪用水導入施設・国交省国道事務所・長岡市衛生センターなど見学
- コンピュータによる調査や長岡警察・市役所・地域の方などへのインタビュー
- わかったことを個人レポートにまとめ、保護者地域の方を招いた全員発表会を行い、自分なりの自然環境の保全方法を訴えた。



信濃川のフィールドワーク（土手での観察）と校内での成果発表。

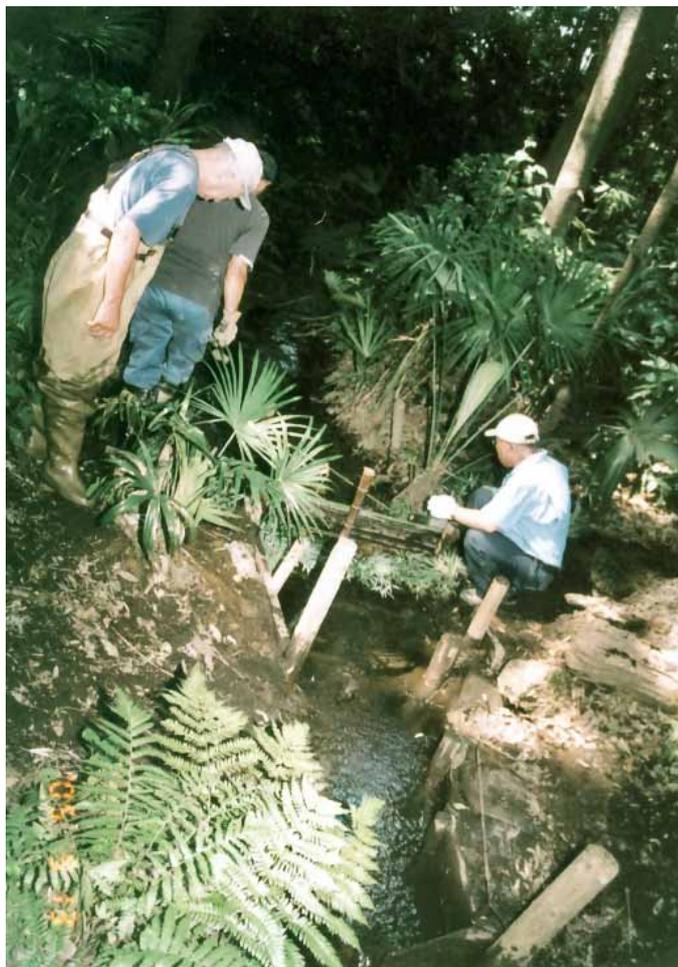
▼活動の効果

- 生徒自身が、夏休みや休日を使って、野外観察に出かけたり、河川事務所や長岡市主催の水質教室に参加した。（25人）又、8月の長岡花火大会清掃ボランティアには、100人以上の1年生が参加した。
- 全校生徒のボランティア活動として、河川敷の清掃を行い、多くの生徒が参加した。
- 11月の全員発表会には50人の保護者・地域の方が参加した。後期の環境学習に協力をお願いしたところ14人もの保護者が、物品の貸し出しや協力を申し出た。
- 年度末のアンケートでは「総合学習の内容は適切で、子どもは積極的に活動している」と保護者の84%が評している。
- 川や環境をテーマに学習しているということから、地方テレビ局から「小中学生の環境学習」というテーマの番組に取材され、2人の生徒が番組内のディスカッションに参加した。

▼苦勞した点・反省点

中越大地震の影響で当初予定していた「長岡市妙見堰取水場」が改修工事となり、見学が不可となった。また、「五辺の水辺」と呼ばれる野鳥の営巣地の公園設備も破壊され、野外活動の範囲が狭くなってしまった。生徒に豊かな信濃川の自然を充分体験させて、追求課題を見つけさせることができず、生徒の「川は濁っているから汚れている」という予見を打ち破ることに苦勞した。せめてもう少し、たくさんの有識者に「信濃川の豊かさ」や生徒の知らない「信濃川」を語っていただき、確認という意味を込めて、フィールドワークに連れ出せば、多様な追求課題を見つけることができたのではないかと反省している。

和泉川東山の水辺愛護会



湧水路の整備

▼活動の目的

水と緑が育む、安らぎのある暮らしのまちづくりの基軸として和泉川は瀬谷区のシンボルとなっています。この和泉川の流れの源流は瀬谷区内にあり、当宮沢地区内に数ヶ所の湧水地が点在しています。

その中の2ヶ所の湧水地点の湧水量の調査ならびに周辺地域の保全・管理を行いながら、活動状況を記録化・環境団体同士の相互交流・ネットワーク化を促進して、ひろく市民自身による地域づくりの一端を担うことを目的に活動しています。

▼活動の内容

特別緑地保全地区並びに他の竹林内にある湧水地を整備して三角堰を制作・設置すること。

三角堰から流出する水量・水温・水質等を測定すること。

周辺の生き物を観察すること。

他の活動団体と連携して樹林・竹林・水辺周辺の整備をすること。

関係団体による発表会に参加して活動の成果を紹介すること。



ひっそり佇むシラサギ（生き物調査）



子供たちとの交流会

▼活動の効果

宮沢地区を流れる和泉川の流域で活動している森の愛護会・水辺の愛護会等、7つの自然環境保全活動団体の協議発足のきっかけとなったこと。

現場見学やパネル展等による活動事例を紹介することにより地域の水・緑に対する関心が高まってきたこと。

市の行政担当者との連携が密になったこと。

▼苦労した点・反省点

2級河川である和泉川の源流は瀬谷区内の北部の市民の森ですが、年々湧水量が減少して、湯水期になると和泉川の水の流れは涸れてしまいます。

その要因として降雨量・周辺の土地の宅地化等が挙げられて、横浜市では和泉川再生事業としてアクションプログラムにより地域住民との協働事業を推進しています。

地域住民の意識の高揚をはかりながら地域づくり、まちづくりの一環として取り組んでいるのですが、即効性のない地味なとりくみのため一般住民の関心を高めることに苦慮しています。

継続こそ力なりをモットーに今後も取り組んでいきますので、ご支援下さるようよろしくお願い申し上げます。

狭山の副池自然づくりの会



水辺と草地の生き物探し



炭を撒いて水質浄化を試みる

▼活動の目的

狭山副池オアシスは灌漑用ため池の一部を埋め立てて造成された公園である。ビオトープとして在来の動植物を誘致・保護するために、生き物にとってより良い環境とは何かを学ぶ環境学習としてこの活動を計画した。生き物や植物の調査をしながら、身近な自然が人の手によっていかに汚されているか、また人にとって都合の良い公園が他の生き物にとってどれほど過酷なものであるかを実感し、今後のビオトープ作りに役立てていこうというのがこの活動のねらいである。

▼活動の内容

- 5月：公園内の水辺に生息する生き物調査
- 6月：水辺の植物調査。在来種と外来種を見分けて観察しながら草取りをする。
- 7月：ビオトープ池やせせらぎ水路の水質パックテストと水質浄化
- 8月：ふえすぎた水生植物（ガマ・ヒメガマなど）の除草
- 9月：水辺と草地の生き物探し
- 10月：水辺の清掃と秋の植物調査



在来種と外来種を見分けて観察しながら草取りをする



ふえすぎた水生植物（ガマ・ヒメガマなど）の除草

▼活動の効果

生き物探しの活動は子どもたちに大人気である。身近な場所で安心して虫や魚と触れあうことのできる幸せを参加者には肌で感じてもらえたと思う。また、より多種多様な生物を誘致するためには池や川を汚さないことが重要だということを、活動を通して伝えることができた。清掃・除草などの活動に関わった参加者は、人に優しい自然は放置するだけでは手に入れることが出来ないという当然のことを再認識した。

▼苦勞した点・反省点

隣接する池の水位上昇の影響をまともに受けて、水辺の観察会に支障が出た。ガマ刈りや水辺の植物の除草の時期が遅れ、予想以上に手間がかかった。一方で秋の生き物観察の前に業者による草地の除草が完了したので、昆虫の種類が少なくなってしまった。観察会と作業の日程を再検討し、来年度の活動に生かしたい。



帰化植物の除草活動

▼活動の目的

野川は、セイヨウカラシナ、ネズミムギ、セイバンモロコシなどの帰化植物が河道内に広く分布し、在来植物はほとんどみられない状態です。また河道の直線化により水生生物の生息種数も少なく、小魚などが生息できる場所も限られています。

当会では、地域住民や地元小学校などと観察会や勉強会をとおして、在来植物の復元を図るとともに水生小動物や水辺に生息する動物の生息環境づくりを進めることを目的としています。

▼活動の内容

粘土団子散布による在来種の種子の播種、水辺地形の改変による環境の復元。植物相、水生生物、昆虫類の生息状況の観察と捕獲確認調査。

Webへの調査結果の公開

地元住民との連携活動、勉強会の開催。



帰化植ヨシ地下茎採取



定量調査風景



抜根・除草風景



粘土だんごの散布

▼活動の効果

粘土ダンゴを播いた在来種復元の効果は明確には認められなかったものの、地域の川の風景の復元のために帰化植物を抜根し、在来種の植栽を試みた結果、実験区で水辺の植物が再生し、当地の野川では確認できなかったタカサブロウやヤナギタデなどの植物が復元されました。

この活動に対し、賛同された地元の住民の方の参加（会への入会）がありました。

活動の結果は2006年2月18日に都庁都民ギャラリーで開催された「野川流域連絡会情報バザー」（事務局：東京都北多摩南部建設事務所）でも紹介しました。参加者から評価の意見を頂きました。

▼苦勞した点・反省点

地元小学校との連携を念頭に活動しましたが、活動の開始時期やこちらからの提言時期が適切でなく、総合学習に組み込んでの活動をお願いすることができませんでした。

植栽直後のヨシ・オギが帰化植物に負けてしまい、群落を形成することができませんでした。今後は管理方法を再検討し、復元を図っていく予定です。

より多くの地域住民の参加を促すため、町会の掲示板への活動ビラの掲示を考えています。



大谷川の生き物調べ



四季を通じての川遊び

▼活動の目的

幼児期からの体験活動を通じ、ふるさとを思う心や、自然とかがわる中で、五感で感じる体験を積み重ねながら、自然体験教育の大切さを学び、心の広がりや心のよわらかさをはぐくむ活動を行うことを目的とする。

▼活動の内容

- 大谷川の生き物調べや生き物の飼育
- 四季を通じての大谷川での川遊びの実践
- 大谷川周辺の水辺の植物観察
- 大谷川周辺の清掃・美化活動
- 地域への啓発活動

▼活動の効果

地域で行われた夏祭りの際、幼稚園を開放し、大谷川の生き物を飼育・観察している「ふるさと水族館」を見学してもらう機会とした。見学された多くの方から、「生き物に関心をもつことができた」また、「生き物が住むきれいな川をまもっていくことが大切だ」などの感想が届き自然を大切にしていけることを共有できた。

▼苦労した点・反省点

大谷川での生き物にふれあう際、大切に扱うよう指導にあたっているが、大切にしているつもりでも魚の種類や大きさによっては、持ち帰る途中で元気がなくなり、死んでしまうこともあった。指導者自身ももっと川の生物の事をよく知り、子どもたちに指導していかなければならないと反省している。

▼活動の目的

市民の河川浄化や水文化への関心と理解が高まり、河川津化への積極的取り組みが広がること。

また、市内を流れる「山の井用水」、「中の井用水」、「花宗用水」の水路の開墾、整備・保護などの先人の努力や、水の効率的な利用、汚染防止の工夫などの先人の知恵を学び、活動に活かすこと。



「水みちマップ」づくり調査

▼活動の内容

- 福島小学校4年生の総合学習に参加し、子供たちの研究発表を聞き、講演をしました。
- 旧福島町内を水路に沿って歩き、水環境などを観察・測定をし、その結果を地図に記して、「水みちマップ」を作りました。
- 「かわ探検」で子どもと一緒遊び、学習しました。
- 合成洗剤と石鹸の違いを学ぶ合成洗剤学習会を開催しました。
- 文化池と八女公園の池などの河川清掃をしました。
- 市と共催で「水の恵みを語るフォーラム」を開きました。
- 見崎中学校の総合学習のフィールドワークの案内をしました。

▼活動の効果

- 「水みちマップ」を作ることにより、市内の水環境を総合的に把握できました。
 - 合成洗剤学習会により、家庭排水が水路汚染の原因の一端であることが理解できました。
 - 小学校、中学校、高校の子供たちが、水問題への関心を深めてくれました。
- 一例として、
- 「水みちマップ」づくりには就学前の子どもから高校生まで多くの子どもたちの参加がありました。市内の中学校から総合学習のフィールドワークの案内を依頼されました。また、フォーラムに出席した八女農業高校の生徒は、貴重な質問・要望を出してくれ、北九州市開催の「ふくおか水もり自慢」を聴講するきっかけになりました。

▼苦勞した点・反省点

- フォーラムなどへの市民参加の呼びかけに苦勞しました。
- 検査器械の借用など、資材・道具等の借用・入手に苦勞しました。
- イベント開催の際、例えばチラシや看板やフォーラム会場ステージ背後の横断幕の製作など、多くの面で、費用の削減に苦勞しました。
- フォーラムなどへの市民の参加を更に増やために、もっと親しみやすい名前・形式など工夫の必要があります。



水生生物調査



パケットテストによるCOD調査

▼活動の目的

- 普段、川と接していない子供たちに、川の楽しさを知ってもらい、動植物との共生、水の大切さを学ぶ。
- 講師を依頼することで、正しい知識を学ぶ。
- 他のこどもエコクラブのメンバーとの交流。
- 学んだ事を発表することで、多くの人に川への親しみと環境について、意識向上を図る。

▼活動の内容

- 4月29日：水生生物、水質予備調査。正確な水質調査方法を学ぶ。
- 8月12日：千代田町子どもエコクラブと合同体験学習、「雄川で遊ぼう学ぼう2005！」開催
- 8月21日：高崎地区のエコクラブ交流会で「雄川で遊ぼう学ぼう2005！」活動を発表
- 10月30日：群馬大学で群馬県理科自由研究発表（雄川水生生物水質調査）同作品を第49回日本学生科学賞に出品。県で優秀賞受賞。
- 1月28日：群馬県こどもエコクラブ交流会で発表。講師の先生と一緒に活動発表。



気温、水温、水深、流速、川幅、川底の様子などを測定



こどもエコクラブ大会にて水質調査について発表。

▼活動の効果

- 講師の先生からきちんとした計測方法を学んだ。
- 家庭からでるゴミで川が汚れることを知り、調査や清掃をいやがらなくなった。
- 千代田町のやってんべえジュニアクラブの子ども達は、川に入って虫をとったり、魚をとったり泳いだりして、川で楽しく遊べるのが分かって感激していた。
- 当日参加できなかった子ども達にもクイズ形式の発表によって、どんな水生生物を採集したかわかり、川石を使ったストーンアートなどでも楽しめた。
- 18年度は、群馬県エコクラブ事務局が交流会の一つとして特色のある、各地域クラブの行事に参加し、余湖のネットワーク作りをしたいという案が出された。

▼苦勞した点・反省点

- 8月12日は雨であったため、エコムーブ号による屋外学習を急遽、地元秋畑小学校でおこなうのに用具や人の移動が大変だった。
- 8月12日は活動状況を群馬テレビが収録していたので、子ども達が少し緊張してしまったことと、取材に対応し時間調整が大変だった。



猪名川本流下流域での環境調査

▼活動の目的

猪名川は、川西市内を南北に縦断している川で、市民の飲み水にもなっている。しかし、国土交通省の河川調査では、ほぼ毎年ワースト5に名を連ねている。本プロジェクトでは、上、中、下流の学校が協力して環境調査を行い、猪名川全体の環境を知り、そこから自分たちにできる環境改善のための方法を考え、実践し、環境保全の大切さを学んでいく。活動については掲示板やテレビ会議を活用して交流し、学習を深めていく。

▼活動の内容

プロジェクト参加校が猪名川の上流、中流、下流のそれぞれの場所の環境調査（CODパックテスト、指標生物調査）を行い、その結果を電子掲示板で報告、共有した。掲示板から猪名川全体の水質環境を知り、環境改善のために自分たちにできることを考えた。お互いの考えを電子掲示板で討論し、テレビ会議を通じて交流し、兵庫県立人と自然の博物館からもアドバイスをいただいた。今後、自分たちで考えた環境改善の方法（ポスター掲示、清掃活動など）を実施予定。



猪名川支流の初谷川での環境調査



猪名川本流中流域での環境調査

▼活動の効果

初めて猪名川に行った児童も多く、川の水の冷たさや楽しさ、そこに様々な生物が住んでいることを知ることができた。環境調査によって、猪名川全体が「少し汚い水」であることを知り、自分たちの飲み水になっている川をきれいにしなければと意識し、「食べ残しをしない」「油などを流さない」「ゴミを減らす」など自分たちが家庭で身近にできる活動を行うようになった。今後、自分たちだけでなく、地域の人にも協力してもらおうとポスターを貼ったり、ホームページを作成したり、清掃活動なども行う予定。

▼苦勞した点・反省点

- プロジェクト参加校4校の環境調査の日程調整が難しかった。
- 指標生物の同定が難しく、そのためのゲストティーチャーの確保に苦勞した。



海水浄化実験と海洋生物の観察

▼活動の目的

子供たちが、明確な目的があるストーリーに則り主体的に活動を進める中で、楽しみながら教育ゴールを達成することを目指して開発されたプログラム。海洋生物の観察や海水浄化実験を通して、海中の海藻および海洋生物が水の浄化を推進することを体感するとともに、水辺の環境と海洋汚染問題の関連性についても考え、最終的に活動で得た情報を展示としてまとめ、海水浴に訪れた一般市民の海に対する環境意識向上につなげることを目的としている。

▼活動の内容

- 1 海辺の教育プログラム『海を守れ！海洋戦隊マイクロレンジャー』の実施：海を汚す帝王ヨゴサナイトを倒すために、マイクロレンジャーの一員となって、海をきれいにする秘密を探し出すというストーリーのもと、班別に分かれて、海水浄化実験と海洋生物の観察を行った。海水浄化実験では、子供たちが、浄化作用があると予想されるものを海辺で収集し、それらを汚れた水の入った水槽の中に入れ、一定時間放置した後の透明度の変化を調べた。実験の結果が出るまでの間、ペットボトルで作った箱めがねやルーペ、テレビスコープなどを用いて海洋生物の観察を行った。生きものに関する情報や海水浄化実験の結果は、各班がワークシートにまとめた。
- 2 海水浴場での啓蒙展示（8 / 1 - 8 / 15）：上記活動で子どもたちが作成したワークシートをまとめ、出崎海水浴場に半月間展示した。



海水浄化実験と海洋生物の観察



海水浴場での啓蒙展示

▼活動の効果

マイクロレンジャーの一員となるという演出を用いたことで、子供たちが明確な目的を果たすために、主体的かつ積極的に活動に関わることができ、モチベーションが活動の終始に渡り保たれた。そのため、満潮という悪条件にも関わらず、生き物に対して敏感になり、より多くの発見を探求する姿勢が見られた。何より、自分たちの力で海水の浄化システムに気づけたことは、海的环境に関心を向ける大きなきっかけとなったようである。又、こうした子どもたちの成果を海水浴場に展示したことで、海水浴に訪れた一般市民にも大きな反響があり、海水浴場の管理者より一般向けのワークショップとしての開催依頼があった。本プログラムに対して、発展の可能性が大いに見出せた。

▼苦勞した点・反省点

プログラム実施日時が満潮に重なってしまったため、子供たちの活動範囲が限定され、本来出崎海岸が持つ磯の生物の多様性と面白さを子供たちが存分に堪能できなかった。又、海水面の上昇に伴い、こうした活動を行う上での十分な救命救急用具ならびにスタッフを完備する必要性を感じた。

▼活動の目的

私たちの暮らしを振り返り、将来においても私たちの暮らしが継続可能であるよう、人と自然との関わり方について考える。

A．川遊びや水辺での活動体験を通して、水辺に親しむ態度を養う。

B．それぞれの生物に適した生息環境を観察・調査し、自然環境の多様性や共生した暮らしについての考えを深める。

C．飼育や増殖を目的に水槽飼育やビオトープ作りを行う。



自然学習交流会での干潟調査

▼活動の効果

- ・ 水環境の悪化を自分たちの生活と結んで捉え、先人の考え方に学んで、その知恵を生かしていこうと考えるようになった。
- ・ 水辺の生き物たちは長い年月をかけ、体の特徴や生活の仕方を様々な水辺の環境にうまく適応し、進化してきたが、最近の急激な環境変化によって、危機にある生物が増えていることを知り、よりよいビオトープづくりを通して、野生生物を護ろうとする態度が育った。
- ・ 県外の異なる水辺環境、実践校との交流を通して、活動への意欲を高めることができた。とくに高校生の活動に触発され、檀紙小水族館作りとビオトープ改修への意欲を高めた。

▼活動の内容

近隣の河川の定期的な水質及び生物相の調査

地域・研究機関と連携した水生生物の飼育と増殖

のための学校ビオトープの改修と整備
環境保護先進地への視察（7月に愛媛県今治市及び大洲市で予定）

▼苦勞した点・反省点

様々な活動を繋いで、日々の体験を取り入れながら、環境学習に取り組んでいるが、要所所では専門的な知識や技能を持った専門家の存在が不可欠である。まだまだ、人捜しの必要を感じている。



水生生物の飼育



葉山川探検ネットワーク（水質調査）

▼活動の目的

- 葉山川の環境保全活動を通じて、流域の小学校、地域協働合校の人達と協働作業を行い、将来を担う子ども達に自然体験の面白さ、川に対する愛着心と自然保護の大切さを学ぶ場づくりを行う。
- 調査した水質、水生生物、歴史等を地域、行政、協働合校等に情報発信する。
- 私どもの行っている諸活動が、滋賀県が推進しているマザーレイク21計画に、又琵琶湖・淀川流域の水質保全活動に少しでも貢献できればと願っています。

▼活動の内容

- 葉山川での毎月の水質調査、流域での特徴的な水生動植物観察
- 流域の小学校、協働合校の人たちとのめだか学習会、放流会等を実施
- 協働合校での親子体験教室の開催
- 流域の小学校で炭焼き、炭を使った水の浄化等についての総合学習会実施
- 毎月の葉山川流域での清掃活動（エコフォスター制度）
- I L E C、県、市の環境会議、琵琶湖・淀川流域交流会等との交流、展示会に参画

▼活動の効果

- 地元小学校で炭を使った水浄化実験で、浄化装置作りからの体験学習を行ったが、炭で水の浄化ができることに、多くの子ども達が興味をもって取り組んでいた。
- 地域協働合校とのめだか学習でのめだか放流時、子供達の目が生き生きしている様子が伺えた。子供達は生き物に大変興味を示し、自然とのふれあいを楽しんでいた。
- フィールドの葉山川は地域の散歩道にもなっており、清掃活動、水質調査、子供達とのめだか池での学習時、出会う人達からの多くの質問等を受けた。これらを通じて地域の人達の環境への意識高揚につながればと願っています。

▼苦勞した点・反省点

- 流域の小学校との協働では学校間の温度差を感じた。水環境に熱心な先生の有無で協働がスムーズに行く場合と、なかなか話し合い迄、至らない等苦勞もあった。
- 炭を使った水浄化実験で、ペットボトルを使って装置を作ったが、子供達が準備したペットボトルの洗浄不十分で、実験前後値が逆転したケースがあった。材料の準備等の気配りと痛感した。



野川の生き物調査

▼活動の目的

世田谷に残された大変貴重な自然の中で、湧き水からできている野川を大切に、後世にまで残そうと考えています。野川と親しみ、川の中にはどんな生き物がいるのか、また、季節ごとにどのように変化するのかなど、楽しみながら学びたいと思っています。

▼活動の内容

野川の生き物調査を季節ごとに子どもと大人で楽しく行いました。川での魚の採り方や季節ごとの生き物の変化を学びました。また、講師の方から、水のきれいな所に棲む生き物や汚れた所に棲む生き物などを教えてもらいました。

浚渫工事後の状態が悪かったため、世田谷区内の野川で活動している3団体で相談し、世田谷区と東京都へ工事内容について要望しました。

このことをきっかけに、生き物調査の都度、世田谷区へ写真付き報告書を渡すことにしました。



野川の生き物調査

▼活動の効果

この地域の野川は、身近にありながら、柵に柵が掛けられていて通常は入ることが出来ません。上からはイシしか見えませんが、川に入ってみると色々な生き物に会うことが出来ました。その小さな生き物達が隠れているのは、川の端の草がガサガサしたところ。文字や言葉でなく、体験として、川が面白いこと、生き物が棲むにはどのような環境が必要かを感じ取ることができました。浚渫工事が生き物調査実施場所でも行なわれましたが、流れを蛇行させたり、瀬を作っていたりすることができました。

▼苦勞した点・反省点

苦勞する点としては、毎年、春・夏は参加者が多いのですが、秋は地域で色々な行事があり参加者が少なくなってしまうことです。反省点としては、浚渫工事が行われる前後で、水質調査をし比較したかったものの調査費用が高価だと聞き諦めてしまったのですが、後で何か良い方法があるらしいと知ったことです。

多摩川水辺の親子学級



▼活動の目的

平成18年度開設予定の「府中水辺の学校」の活動を想定し、開設準備に参画し、水辺の学校の水辺環境の構想と活動計画を策定する。本年度は、市民対象の観察会と子供を対象とした夏季水辺の親子学級を開設し、多摩川流域で想定される多様な活動の成果を生かし、「府中水辺の楽校」の具体的活動の基礎資料に資する。

▼活動の内容

- 市民対象の多摩川観察会（府中崖線をたずねて）(H17.6.26)
- ・府中大国魂神社南の崖線を起点に東進、多磨霊園南の「ムダ掘り跡」まで約3kmの段丘崖を観察し、あわせて多摩川低地に残存する府中用水路の観察も行なった。
- ・崖の高さを地図と目測で観察しながら、古多摩川が刻んだ崖と流路を知った。お瀧神社などで段丘崖からの湧水を確認した。
多摩川水辺の親子学級(H17.8.21)
- ・多摩川で、石遊び・釣り・水質調べなど子ども川の川に学ぶ多様な活動を行った。同時に川についてお話を聞くなど多く学ぶ時間を持った。



多摩川水辺の親子学級

▼活動の効果

市民対象の多摩川観察会（府中崖線をたずねて）

- ・府中近傍の地形区分の具体的な観察を通して、巨視的な視点から多摩川に対する市民の理解を深めることができた。
- ・段丘崖に今も残る樹林と湧水など豊かな自然への市民の認識を深めることができた。

多摩川水辺の親子学級

- ・好天に恵まれ、子どもにふさわしい水辺の活動の実際を把握することができた。
- ・関係者や市民の「水辺の楽校」に対する理解を深め、「水辺の楽校」の具体的活動の参考事例等、基礎資料を得ることができた。またやってみたいという子どもの声から、子どもたちの川に対する関心・意欲を高めることができた。

▼苦勞した点・反省点

市民対象の多摩川観察会（府中崖線をたずねて）

- ・屋外の活動ゆえ、コンパクトな資料をどう盛り込んだらよかったか。
多摩川水辺の親子学級
- ・子どもにとって最適な水辺の活動の実際を、楽しさ・理解・安全への配慮と市民参加の観点から再検討をする。



多摩川観察会（府中崖線をたずねて）



特別採捕と発眼卵放流事業

▼活動の目的

観光地や高原野菜の基地として発展してきた菅平高原を流れる神川上流域（渓流域）でのイワナの生息状況を把握し、今後の渓流漁場としての管理のあり方を考案していくことを目的とする。

▼活動の内容

対象河川を管轄している上小漁業協同組合、及び長野県佐久水産試験場指導のもと、イワナの資源調査を行う。同時に、環境保全研究所に依頼してDNA解析を行い、今後の動向のデータとして蓄積していく。

冬に発眼卵放流を行い、地元菅平小学校のクラスにも発眼卵の配布を行い、イワナに対しての興味を引き出す。

▼活動の効果

- 上小漁協との信頼関係が蓄積された。（過去3年間の勉強会をふまえた上での今回の調査で協力を得られたこと）
- 菅平小学校の子供たち（特に5年生）が総合学習における菅平湿原の調査に兼ねて、より興味を引き出せることができた。
- 上田市合同庁舎からの依頼で発眼卵を今回のイベントと同時に展示することができ、庁舎に訪れた多数の市民に、イワナの稚魚孵化までを実際見て楽しんでもらった。

▼苦勞した点・反省点

- 特別採捕許可申請（県知事提出）がはじめての事で地方事務所とのやりとりに手間取った。
- 発眼卵放流が12月で今年は厳寒、雪も多く、子どもたちと一緒に行うことに難点があった。

▼活動の目的

子供達が海老川沿いを歩いていると、川の水が汚れている、泡が多くて変なおいがする。自分達で出来ることは何か・家庭雑排水のダイエツト作戦活動をする事にした。「親水祭り」「ウォークラリー」に、参加した市民の方々に「廃油石鹼作り」水質検査「パックテスト」の体験コーナーを実施した。自分が、肌で感じ、見て感じ、歩いて感じる事から参加意識を高める事を目的とした。小学校や町会にもこの活動を進めている。環境教育は学校教育の中で、児童から家庭へ家族団欒の話題から参加意識を高めて育てる。身近に実行してもらおう事が願いです。

▼活動の効果

デモンストレーションだけに終わらず、川沿いの小学校や地域の自治会、町会等に講習指導する事で、家庭での会話やお手伝いの意識に繋がり「川の水をきれいにしよう」と感じる様になった。環境の大切さにつながり、保護して守っていく認識が確実に芽生えていると感じている。今年の春には鮎が海老川に遡上した「水がきれいになっている」事の効果と考えている。



海老川（八栄橋下流付近）：千葉県Website

▼活動の内容

油石鹼作り = 春と秋の親水祭りで実演講習会の実施・環境フェア・公民館自然店他アクリルたわしの作り方 = 台所洗剤のダイエツトと水の減量につなげた。

水質検査 = 合流川の水でパックテストをおこない色で比較実感、透視筒で汚れをみる。

川のごみ清掃 = 川辺の清掃、川はボートでゴミ取り掃除を行っている。

牛乳パックリサイクル = ごみダイエツト（ペン立て、小物、イス等々の作り方指導）

▼苦労した点・反省点

- 雨天の影響で、オルトケイ酸ナトリウムを、ビンに移すのが大変でした。雨 = 傍聴しやすく湿気てビンに移しにくくなる為、時間がかかりすぎる。
- 学校のPTAの皆さん達と共にこの活動をさらに市内全域に広めていきたいと思うが、材料や試薬、機材等の実情によりなかなか進んでいない実情です。今後も継続していきます。

▼活動の目的

平成16年7月18日福井豪雨災害によって河和田川も大きな被害を受けた。川の生き物や川の自然環境、水辺の様子などを観察記録することで、川の自然がどのようにして再生してゆくのかを見守ってゆく。

▼活動の内容

平成13年度から水辺の探偵団結成、河和田川の生き物（ホタル・水生昆虫・魚類）の観察を始めた。この記録を基に、水害前と水害後の水辺の生き物や環境の調査をする。今回はここまで。次は11月の地区文化祭に向けてデータをまとめて地域でその結果を展示発表することである。



河和田川の生き物の観察



▼活動の効果

川の生き物の観察では、意外に多くの魚類・水生生物が確認できて良かった。地域への波及効果は展示発表時にアンケート調査する予定。

▼苦勞した点・反省点

楽しいということで、また参加したいという感想のみ。



市内4河川14ポイントを定位置とした継続的水質調査

▼活動の目的

現在の私達の生活にとって、環境問題とは常に考えるべき存在である。しかしながら、実際にはボランティア活動でゴミ拾い等の一時的な体験学習は出来ても、継続的な環境調査に接する機会は中々無い。その為、実業高校でもある本校は就職する生徒も多いことから定位置による定期的な水質調査を行うことにより『目に見えない環境の変化』を体験する学習の機会を設けたものである。また、考える力を養うためでもある。

▼活動の内容

市内4河川14ポイントを定位置とし、継続的に化学的な水質調査を行う。
調査項目は気温・水温・pH（水素イオン濃度）・TDS（不純物溶解度）・COD（化学酸素消費量）・BOD（生物化学酸素消費量）・NO₂⁻（亜硝酸濃度）・NO₃²⁻（硝酸濃度）・塩分濃度の8項目である。ただし、亜硝酸・硝酸については不定期（検査薬の不足による）でCOD等数値が異常な場合に調査、BODは検査時間が長くなるため、月1回で行っている。また本年度より大腸菌検査を各河川で2回ほど実施した。

▼活動の効果

見た目と実際の水質とのギャップに驚きを隠せないようだった。透明な水＝綺麗な水という概念は払拭されたようである。また、日頃の生活排水やゴミの廃棄等にも気を使うようになったということだった。また、水産系へ就職する生徒は海の環境は河川が守るの認識をしっかりと持てたようである。

自転車に乗って市内の河川へ向かうため、とにかく目立つ。今年は5年目ということもあり、周囲の人も暖かく見守ってくれているという感じである。また、周囲の人と話す機会が増えて良かったという生徒もいた。

▼苦労した点・反省点

自転車で一気に各調査ポイントに散るため事故が起きないようにする事と、万が一事故が起きたときの対応マニュアルを生徒に理解させるのが大変だった。また、データを自分自身で収集分析してレポートにまとめるという初めての作業に戸惑いを見せる生徒も多く、また生徒ごとに戸惑う場所が異なるため、どのような点からアプローチさせればよいのか個人個人への指導が難しかった。ただ理解出来てくると乗ってくる生徒も多く学園祭での発表なども楽しいものに仕上がった



地元小中学校の総合学習（川底に棲む生き物の観察）を支援

▼活動の目的

「水車が回る用水路や横を流れる厳木川」をフィールドとして、小中学生の「環境学習」できる水辺の整備（草刈・危険物の除去）と水の多様性について学ぶ学習を支援する。また世代間交流の「川の安全教室」を開く。特に人材（シニア）育成を図り「水辺が子供達の居場所＝水辺の学校」につながる活動を目指す。

▼活動の内容

- 5月～12月：河川周辺の安全対策と環境整備（フィールドの長さ400M）を年に数回実施した。
- 5月～10月：小中学生の「総合、体験学習」の時間を使って、「魚類観察会や水質検査」などの支援活動。
- 夏休み世代間交流「リバースクール」（実施日7.30, 8.5, 6, 7）実施、97名が参加。
- 10月23日：小学校3年生は、九州川のワークショップ「遠賀川」で「学習の結果」を発表。
- 10月～11月：総合で学んだ学習をまとめとして、学校や各地域で発表会（5回）を実施。



総合学習（魚道の役割調査）の様子

▼活動の効果

5月から12月まで水辺の環境整備をしながら4年目が過ぎ、すこしずつ回りの環境が良くなってきた。

今年の特徴としては、小学校3、4年生は6月から「水車」のある「水辺・田んぼの学校」を学習の場として魚の観察会、水質調査、夏休み親子リバーズクールなど参加者も多く水の素晴らしさを体感できた。

また「まとめ学習」では学校や町内施設の発表のほかに、3年生は、福岡県直方市で行われた「九州川のワークショップ」で発表。4年生は、県内（武雄川）で開催された「さが水環境フェア」に於いて発表。このように水環境をテーマにした学習の成果を、地域社会に発表できた意義は大きく、学校教育の学習支援団体として好評を頂いている。

▼苦勞した点・反省点

リバーマスタースクールの開催は今年で2年目ですが、近隣の小中学生・児童の参加も少しずつ多くなってきたことから、来年度はライフジャケット（大小）と救命用具の補充が必要。

昨年から、高齢者（シニア）の指導者育成と前期高齢者の参画を推進している。



九州川のワークショップ」で発表



水辺観察のようす

▼活動の目的

ホタルは水、緑（植物）、空気（空間）、土などの環境条件が、ほどよく調和した「自然」の中でのみ生きられる生き物です。そして、そのような自然には水生、陸生を問わず多様な生物が住みつき、豊かで安定した生態系が確立されています。人間も自然の一員です。つまり、私たち「ホタルの会」は、身近に生きるホタルの生活を見つめることで、人間にとって好ましい自然環境とは何か、人間が安心して暮らせる自然とは何かを考えることにしました。そして、そのような自然環境の保全・再生のために、私たちの出来る行動から始めることを目的とします。

▼活動の内容

ホタルを通して自然保護の啓蒙活動を行う。（「ホタルフリートーク」と名付けた水環境問題に関する自由討論会の開催・ホタル保護団体交流会を主催し水辺環境を守るための連携を強化）

ホタル生息地の保全・整備活動（湯福川、岩倉沢川の草刈りや植樹・清掃）

ホタル観察会や勉強会の実施（長野市主催水辺観察会・PTA・育成会・公民館・自然保護センターなどと連携した勉強会や観察会の実施）

定点観測（長野市内10数カ所で個体数を観測し現状把握）



水辺観察のようす

▼活動の効果

参加団体のさまざまな取り組み、悩み、アイデアを出し合い、一緒に考えることで、活動の参考となることが多くあった。県内の情報を交換し連携することで環境保全の輪が広がった。

ホタル生息地に手を加えることで、ホタルの生息に適した環境の一部が整い発生が持続している。

身近な場所にホタルが生息していることを市民に理解して頂き、環境保護の大切さを理解して頂いた。また、次世代を担う子供たちの関心を高めることができた。

定点観測は平成5年から実施している。気温、水温、個体数を観測することでこれらの関連性がわかるほか個体数の変化が確認できる。長く継続することでデータの重要性が高まる。

▼苦勞した点・反省点

関連団体を取りまとめる幹事団体及び人材の確保が近々の課題である。

同じ参加者が多いことから要領よく作業できる反面、大勢の人に参加して頂き活動を広げたい。

天候により参加人数の変更や延期が余儀なくされ、担当者の気苦勞が絶えない。

長く継続するための後継者確保が困難である。



「ホタルフリートーク」水環境問題自由討論会・ホタル保護団体交流会



生き物観察

▼活動の目的

校区の豊かな自然に直接触れ、ふるさとの自然を大切にしていこうとする意欲を育てる。
親子でリラックスした時間を過ごすことにより、より一層のふれ合いを深める。
世界的なカヌーイスト・エッセイスト野田知佑講師とのふれ合いを通して、講師の生き方から学ぶ。

▼活動の内容

海と友だちになろう。(カヌー教室パート・パート)
高瀬海岸を美しくしよう。(清掃)
自然・人・家族とふれ合おう。(生き物・自然観察, 家族での食事, 講師との記念撮影)



オヤニラミの放流



カヌー教室（海上での安全訓練）

▼活動の効果

カヌー活動を通して野外体育活動を満喫し、心身を解放することができた。

日頃はあまり触れることのないふるさとの海や水性生物等の自然と戯れることで、ふるさととの思い出を育むと共に自然の素晴らしさ、大切さを体験することができた。

活動の条件を整えてくれた保護者やボランティアスタッフなど、支えてくれた人々への感謝の気持ちを持つことができた。

事後のまとめの学習では新聞作りや絵本作りをし、自分の立てた課題に向かって表現を工夫しながら取り組むことができた。

▼苦勞した点・反省点

カヌーの運搬、簡易トイレの設置等には、クレーン車両（ユニック）も必要であり、それらは保護者の好意によって安い費用で提供され、前々日の準備から当日の後かたづけまで大変な労力を必要としている。

海上での安全を図るため、漁船での巡視を行うなど、保護者の協力なしには成り立たない点で大変さを痛感するが、その反面、大きなやりがいも感じている。

児童数の減少に伴う保護者の減少と、また、必要な機材を無償で提供してもらえる保護者の有無といった次年度の実施にも関わる課題がある。

本年度も、素晴らしいボランティアスタッフや保護者、また、天候にも恵まれるなど、本当に恵まれた条件の下で実施することができ、感謝でいっぱいである。



リバーウォッチングのようす

▼活動の目的

宇陀市大宇陀区には歴史的町並みに沿って宇田川がありますが、度重なる河川工事と生活様式の変化のため、川と疎遠になる人（とりわけ子供）が増えています。私たちは川遊びの楽しさ、自然の大切さの伝承と、多様な生物が共生する川づくりのため20代～70代の大人を集め「宇陀かわびとの会」を設立、一回の定例会と不定期の現地作業を行っています。今回、後世に誇れる宇田川づくりへの理解と協力をするを目的とし、宇田川流域の住民を対象に「宇田川リバーウォッチング」を企画、実施しました。

▼活動の内容

谷幸三氏（大阪産業大学非常勤講師）を招き、午前は野依、午後は黒門横にてリバーウォッチングを行いました。この企画に際して、奈良県大宇陀土木事務所および大宇陀町に様々な形でご協力をいただきました。まず最初に先生からガイダンスがあり、続いて川へ入って水生生物を採取し、宇田川の汚れ具合を判断しました。

また、リバーウォッチングの様子を含めた「宇陀かわびとの会」の活動を、大宇陀町主催の文化祭の際にパネル展示にて紹介しました。



リバーウォッチングのようす

▼活動の効果

地元の大人は「宇多川は汚い」と考えていたようですが、西山では「きれいな部類」に入ることがわかり、以外に思った様子でした。また、水に入った子供たちは「遊びの場としての川」を再認識し、心から楽しんでくれました。

また、これらの活動を文化祭でパネル展示した際に、子供よりも大人の男性のほうが真剣に見ている様子が大変面白いと思い、今後の可能性を感じた次第です。

リバーウォッチングに参加した子供も大人も、もっと美しい、もっと楽しい遊び場としての川づくりが必要だ、というかわびとの会の考えに触れていただくよい機会になりました。

▼苦勞した点・反省点

予想以上に参加人数が少なかった点です。地域の小学校および自治会への呼びかけに力を入れるとともに、川に関心をもつ土壌づくりを推進する必要があると思いました。

「宇陀かわびとの会」のスタンスとしては、川をきれいにする実践活動と並行して地域社会へ対する啓発活動を進めていきたいと考えています。





川の水生生物調べ

▼活動の目的

志津川町の川や海の生物を通して、志津川町の自然・環境について学ぶ。その上で、自分たちの志津川町が、現在どのような環境にあり、未来に受け継いでいくためには、どのような生活をしていかなければいけないのかを考える。



▼活動の内容

- 川の水生生物調べと水質調べをする。
 - 水生生物調べをする。
 - 水質調べをする。
 - 川を調べたことがらをまとめて中間発表会をする。
 - 海の生き物調べをする。
 - 水生生物調べ。主に海藻や小魚など。
 - 海藻について、性質や環境との関係などを、志津川町自然環境活用センターの先生を講師に招きお話をいただく。
 - 海藻の美しさを生かした、海藻押し葉体験をする。
 - 自分たちの採集してきた海藻の種類を調べ発表会をする。
- これまで調べてきたことがらから何が分かったかを作文にまとめる。



海の生き物調べ



志津川町自然環境活用センターの先生を講師に招きお話をいただく

▼活動の効果

- 川の活動では、沢山の生き物が生息していることや、川底が結構汚れている事などに気づくことができた。また、下流に行くにしたがって汚れが目立つ事と住宅地が多くなることには関係があるのではないかとこの問題意識をもつことができた。
- 海の活動では、海藻にもいろいろな種類があり、色や形の美しさを知ることができた。
- 海が汚れるとどのようなことが起きるかなど、環境問題についても考えさせることができた。

▼苦勞した点・反省点

- 川の活動では、台風が過ぎた後ということもあって、いつもよりも水量が多かった。そこで、引率教員を1名増員してもらい上流1名、下流1名と指導教員2名、その他全体監視1名、緊急車両1台という配置で行った。
- 海の活動では、海が荒れていて予定していた活動の半分しかできなかった。しかし、その分荒れていたことで海藻が普段よりも多く採集できた。
- 全体を通して、安全面の対応に苦慮した。引率教員を増員すると、学校の方が手薄になってしまう。計画は、学校全体の運営も考慮して立てなければいけなかった。



洪水時に流れる橋のしくみや水の力を知る

▼活動の目的

カヌー参加者と地域住民と一緒に流れ橋模型流出実験を見ることで、洪水時に流れる橋のしくみや水の力を知ることで、かつての治水と利便性経済性を両立させた工夫を知る。今年、流出実験を見るだけの参加者、カヌーに参加しただけの者も、物作りや、川の中から見ることの楽しさを知る。

▼活動の内容

2005年6月：精華町図書館に出向き、開橋が1972年以前は木造の流れ橋であったという資料を入手し、現地でカヌー川下り終点にする計画とし、実験計画を策定し、模型修理に取りかかった。同時に、カヌーと模型実験の広報チラシやポスターを作成、配布、掲出した。

2005年8月3日（水）：加茂町恭仁大橋下流左岸で練習してから、カヌー川下りに出発、旧泉大橋の橋台や、山城町運動公園前に広がる砂州を見ながら、開橋まで川下りを行った。精華町や地元の土木事務所から5名の参加があり、流れ橋のあったころの思い出についても聞くことができた。

▼活動の効果

上津屋橋地点で過去2年間にわたって行ってきた流れ橋模型の流出実験に、カヌー指導者や参加者、かつて流れ橋があった精華町民が関わることで、流れ橋があった時代の木津川や川沿いの旧構造物、河川敷利用について理解を深めることができた。また、流れ橋の一部ではあるが橋板を流出させてみることで、流れの働きを利用した構造物への理解が深まった。カヌー川下り参加者（昨年からの参加者も6名）と沿川住民とが、通常の川遊びや流れ橋を通じても親しくなり、情報交換しながら今後の行事を組み立てていく基礎にすることができた。

▼苦勞した点・反省点

カヌー川下りを河川環境管理財団や水夢きっずの活動助成に申し込んでおり、助成が下りなかったため、カヌー指導員に流れ橋の方もお願いすることになり、人数不足で、来年の川下り出発点を予定している山城町運動公園には上陸できなかった。当日、朝の内は昨日の雨で増水していたため、流れ橋模型2径間を土嚢などの締め切りで増水させ流出させられると考えたところが大幅に減水してしまい、流れの速い本流で2～3の橋板が流出するところしか、見てもらうことができなかった。



流域住民に呼びかけて水質を調査

▼活動の目的

平成16年度に「川に学ぶ」助成金を受け、ゴミマップを作製したところ、住民の河川環境浄化に対する意識が高いことが分かりました。この成果を活かし、次の段階として、流域住民に呼びかけ、水質調査を行うと同時にゴミ拾いを実施することにより、住民の方々の河川環境浄化に対する更なる意識向上につなげることを目的としています。

▼活動の内容

1. 6月5日に行われる全国一斉水質調査の日に、流域住民に呼びかけて水質を調査すると同時に、ゴミ拾いを行った。（実施場所は、都城市1箇所、小林市1箇所、宮崎市1箇所、国富町1箇所の合計5箇所）
2. 2月11日に地域住民との情報交換会を開催した後ゴミ拾いを行った。
3. 3月4日に「大淀川のワークショップ」で活動の様子を発表する。

▼活動の効果

1. 6月5日（水質検査とゴミ拾い）について
 - 水質検査で川の水の状態を数値で知り、ゴミ拾いで河川のゴミの産卵状況を体感してきたので、河川浄化に対する意識の向上に2重の効果がありました。
 - MRTラジオとNHKテレビの取材があり報道されました。
2. 情報交換会とゴミ拾い
 - 情報交換会で参加した子どもさんから、水辺で遊ぶためには自分たちでゴミ拾いをするのが大切という意見が出されました。
 - 普段、川に親しんでいる子どもさん・親御さんは、住民の河川浄化に対する意識が高いことが分かりました。

▼苦勞した点・反省点

2年目の活動になりますが、参加者数の確保が不十分であり、日程の調整・参加の声かけの方法等が難しく感じました。ワークショップについては、会場の空きが無かったので3月4日に開催いたします。



水質検査の様子



ガサガサ観察会

▼活動の目的

1. 定点水質調査：毎月定点でバックテストによる水質調査を行い、継続して逆川のデータを蓄積することでその水環境をより正確かつ科学的に捉え、流域環境の保全に生かす。
2. 逆川自然観察会：一般参加者を募り、市街地に現存する豊かな自然の解説・案内を通して、身近な自然環境へ関心を持つきっかけ作りを行い、逆川とその自然を広く市民へPRする。
3. 逆川まつり：市民へのPR活動として、昔遊びや水質調査、クラフト作成などを共に楽しみ交流を深め、身近な川に親しみを持ってもらおうよう啓蒙する。

▼活動の内容

1. 定点水質調査：毎月定点で、できるだけ同じ時間帯に、水温・PH・COD・NO₂などを調査。さらに写真撮影を行い、毎月の川の様子を記録。
2. 逆川自然観察会：逆川緑地と流域で見られる身近な自然をテーマに、私達人間の社会活動や地域の歴史とのかかわりにも触れながら、親子で楽しみながら学べる環境教室的な観察会を目標として開催しました。
3. 逆川まつり：本年度は、茨城新聞社が主催する「移動寺子屋千波湖号」と連携し、盛大に開催することができました。当会ではこれまで通り昔遊びやクラフト作成、環境紙芝居、大学生のジャグリング公演、パンジョー公演など行い、茨城新聞社からは水質調査の実況を中心にテントその他備品の供給や広報関連の支援がありました。



定点水質調査



西原観察会

▼活動の効果

1. 定点水質調査：一昨年より始め、20ヶ月にわたるデータの収集蓄積により、逆川の水質状況などの季節的なトレンドの把握が可能になってきました。調査項目に関して参加者自らが学ぶことで知識の吸収へつながりました。
2. 逆川自然観察会：観察会を通して参加者の中から数名が入会するなど、逆川のPR活動としての成果が十分に出来ました。教育面としては、多数の子供達の参加により、逆川こどもエコクラブ発足の足がかりとなりました。学術的には、ひとつのテーマをじっくり見ることで、今まで未確認だった現象や絶滅危惧種に指定されている生物を採集することができました。
3. 逆川まつり：茨城新聞社主催の移動寺子屋との共催により、大変多くの市民に参加してもらうことができました。また偶然にもサケの遡上に遭遇しました。何十人もの市民が、市街地を流れる都市河川での思いも寄らぬ感動的なシーンを目の当たりにし、身近な小川にも豊かな自然が存在することの意外性や、その喜び、その大切さを分かち合うことができたと思います。

▼苦勞した点・反省点

1. 定点水質調査：同じ川でも、人間活動が低い早朝は家庭排水の流入が少なく水質が大変良いなど、時間帯によってその調査内容は大きく変化します。正確な水質状況を把握するためには、毎月同じ日時や安定した天候下で調査する必要があるため、調査日の天候や担当者の都合により若干のスケジュール調整が発生したのが少々たいへんでした。
2. 逆川自然観察会：本年度初めて一般参加者を募り開催したことで、小さな子供が多数参加した会では、そのような場での対応に不慣れなこともあり苦勞しました。指導員は、参加者の好奇心を継続させ、飽きさせない観察会を行うことの難しさを学びました。
3. 逆川まつり：茨城新聞社との共催により、車による運搬やテントの設営など、「逆川を愛する会」だけでは困難だったことができて助かりました。参加者は約250名で、当会単独で開催していた時よりも多くなりました。会そのものの活動をその場で知ってもらえるのは大変でしたが、最後に会作成のオリジナル環境紙芝居をやったことで、会の立場をアピールできたと思います。



手作りの計測器で水の透明度を調べる

▼活動の目的

- 芦田川の水環境改善においては、流域住民が芦田川の現状を理解し水環境を改善していくための各種取組みの実践が必要である。しかしながら、現状としては、流域住民の芦田川に対する関心は依然として低く、芦田川イコール汚い川といったイメージが強く実践度も低い。
- このため啓発効果の高い流域の子供たちを対象に水辺学習会を開催し、水辺の生き物とのふれあいや水質調査などの体験学習を通じて芦田川への感心や興味を高めるとともに川の自然の大切さを伝えていく。
- また、成果として子供たちでまとめる芦田川生き物マップを作成することで、更なる啓発活動への活用を図っていく。

▼活動の内容

- 水辺学習会は平成17年10月9日に、芦田川上流の府中大渡橋、支川出口川の2地点において、流域の小学生約49名（保護者含む）とスタッフなど総勢70名により実施した。
- 調査は、生物や水質の専門家を講師とし、4班の調査グループによる水辺の生き物調査（魚とりと同定、水生生物採取と同定）、水質調査（透視度計測、パックテスト：COD、リン、チッソ）を実施した。
- マップ作り（とりまとめ）は平成18年1月15日に芦田川見る視る館（国土交通省）を会場として実施した。各グループのリーダーが集まり、調査結果をあしだ川さかなマップとしてとりまとめた。



支川出口川に入り調査する子供たち



魚と河床の状態など環境による生息種の違いなど解説



“あしだ川さかなマップ”が完成

▼活動の効果

- 活動後のアンケートでは、「家の近くの川とは違う生き物が見られた」「川にはいろいろな生き物がいることが分かった」「魚が思ったよりたくさんいてびっくりした」「なかなかこういう体験はできないので、良い経験になった」など様々な意見があり、参加者への一定の啓発効果が得られたと考えられる。
- 次年度以降も継続することで、より一層効果を高めることが可能と考えられる。

▼苦勞した点・反省点

- 当初1地点での調査を計画していたが、水質も良く水量の多い本川と生活排水が流入する支川の2地点での調査とすることで、水質など環境の違いによるいきもの変化について体験してもらえるものとした。しかしながら、移動時間が増え、調査時間などが若干短くなった。
- 本年は他団体等のイベントが目白押しで、なかなか日程が定まらず開催時期が遅くなった。



川の生き物調べ

▼活動の目的

学校のすぐ横を落合川が流れ、子どもたちが日々慣れ親しんでいる。生物・水質・環境などを調べることにより、地域の自然を大切にする気持ちを養う。また、上流から下流まで落合川に関わる学区の小中学生・地域が一体となって草刈りやゴミ拾いなどを行い、環境保全に努める。

▼活動の内容

6月上旬に学区の小中学生・地域の方々とともに落合川の清掃活動を行った。この活動を通して身近な川をもっと知って、その環境を守っていこうという気持ちを高め、4年生の総合的な学習として、「落合川探検隊」を結成した。以下の4グループを編成し、活動を行った。

川の様子調べ：上流から下流までの長さを測ったり、川の深さや流れの速さ、水の透明度などを調べた。

川の汚れ調べ：上流・中流・下流の水を採取し、見た目の色、におい、PH、CODの4項目について調べ、それぞれのポイントの汚れ具合を調べた。

川の生き物調べ：主に学校近くに棲む生き物を中心にどんな種類の生き物がいるかを図書室の資料を使って調べた。

川のゴミ調べ：ゴミ拾い活動をしながら、地域の人へ呼びかける看板作りや学校の子たちに呼びかけるポスター作りなどを行った。



川の様子調べ（2メートルまで計れる定規で深さを計測）



「落合川探検隊」を結成し、活動内容の話し合い、観察、発表を行う

▼活動の効果

地域の人と子どもたちが一体となって清掃活動に取り組むことでお互いの関わりを深めることができた。また、自分たちの川だという意識が高まり環境をより良いものにしていこうという意識も高まった。

子ども自身が川の汚れを調べたことで、見た目では分からない川の汚れについて知ったり、川に捨てられたゴミを拾いながら、「このままだと落合川がもっと汚くなってしまう」「みんなに知ってもらいたい」という気持ちで看板やポスターを作ったりしながら、落合川を自分たちの手で守っていこうという意識が芽生えてきた。

また、看板をつける許可をもらいに市役所へ子どもたちと共に行くことで、市にも自分たちの活動を理解してもらうことができた。

▼苦勞した点・反省点

天候によって活動日の変更などがあり、計画的に活動を進めることができなかった。初めて使うパックテストでは、使い方を理解するまでに時間がかかった。こうした取り組みが学校内だけのものにならないように、広く地域へ呼びかけるためにチラシを配布したり、ホームページなどを活用した取り組みを工夫する必要性を感じた。



生き物調査・水質調査

▼活動の目的

「川遊び」を行うことで、自然を五感で感じ取る。「川の生き物調査や水質調査」を行うことで、川の知識を得る。このような活動より、自然の楽しさや大切さを知る。「フォーラム」を行うことで、地域住民がひとつとなり、上流域との交流も視野に入れながら”地域の清流を取り戻す運動”につなげ、発展させていく。

▼活動の内容

- 「水辺で楽しみ隊」（川遊び）（7月～9月に2回）参加者50名×2回：市内の親子を対象に、藻川の生き物調査・水質調査（パックテストpHとCOD）を楽しみながら行いました。
- 「メダカ探し隊子どもネット」（夏休みに4回程度）隊員6名×4回：川のリーダー育成の為、会員の子どものグループを作り、夏休みを通して深く川の事を学ぶ活動を行いました。
- ・川の生き物調べ
- ・琵琶湖博物館へ淡水魚研究
- ・水源地探求と上流の生き物調べ
- ・研究のまとめと成果物作り
- 「水辺フォーラム&水辺祭り」（9月25日）来場者約1500名：猪名川流域のいろいろな団体や個人と水辺の楽しさと大切さを再発見し、清流復元について考えました。



生き物調査・水質調査



「水辺で楽しみ隊」(川遊び)



水辺フォーラム&水辺祭り

▼活動の効果

環境保全を推進する団体としての当協会が、子どもをテーマに子ども会や学校をはじめさまざまな組織を巻き込むことで、それぞれの組織を超えた大きな連携のもとでの活動が実現できた。又、子どもの活動を支援するという目的で地域の大人や青年に呼びかけることで、異世代間の交流が生まれた。

▼苦勞した点・反省点

- 猪名川最下流域都心部を流れる川での活動であり、水質に対する参加者の不安は拭いきれない。
- 中流域、上流域での生き物観察もできればもっといろんな生き物を見ることができるとし、川全体を知った上で、私たちが今後自然環境回復の為に何をすればいいのか？という事を考えるきっかけにもなると思う。



川歩きとヨシ舟が一緒におこなわれているところ



川歩きでとって来た魚を水槽にいれて展示

▼活動の目的

「川を大切に作る人づくり」を進め、鈴鹿川に親しみを持ってもらい、水を大切にする意識を高めることを目的としています。

▼活動の内容

夏の鈴鹿川体験として、今回で5回目の開催を数え、地域での定着がはかられてきています。メインイベントは「川歩き」で親子を中心とした参加者が自然観察指導員から生き物や植物等について学んでもらいます。獲った魚等を水槽にて展示したり、水辺の昆虫標本の展示を行ないました。又、川辺の植物を試食したり、工作コーナーをもうけ、小学生の関心を引くイベントも行ないました。

▼活動の効果

鈴鹿川に接する機会がない、住民の方が、このイベントにより鈴鹿川の存在を受け入れ、体験することで、環境の大切さを実感できたと思われる。又、鈴鹿川を守るため日々活動している人や、団体の存在を知らしめることで共に参加し、活動していってもらえる機会になった。

▼苦勞した点・反省点

イベントを行うには、多くの人スタッフが参加してもらえるように連絡し、情報を提供することや、イベントを運営するための機材の運搬と後片付けに苦勞した。反省としては、PR不足のためか、参加者が大きく伸びなかった。



土砂出し時の水質調査

▼活動の目的

貯水ダムや砂防堰堤などから土砂出しが実施された時、河川環境および防災への影響を最小限に止めることが必要です。山地小溪流に設置された試験堰堤からの土砂出し実験を安全な状態で一般に公開し、人工的な土砂出しの際の川の様子を観察し、河川における土砂流出について理解を深める。

▼活動の内容

土砂出し前の溪流（河床、イワナ、水生昆虫）の調査
 一般参加者に対する説明（ポスター、チラシ使用）
 土砂出し前の溪流および堰堤の堆積物を見る。
 土砂出し時の水質を調べる
 土砂出し時の魚の様子（イワナの非難行動）を見る
 土砂出し時の土砂の移動・堆積の様子を見る。

▼活動の効果

自然の溪流の形態および水生昆虫の多様性が驚きを持って認識された。
 試験堰堤の中で土砂や植物の堆積状態が理解された。
 試験ダムのゲートの開放と同時に激しい勢いで流出する土砂に驚いていた。
 土砂出しに伴う濁水に比較して溪流を硫化する土砂の移動が遅いこと、河床が土砂の堆積で平坦になり水生昆虫などの隠れ場所がなくなることが理解された。
 土砂出しによる水中の溶存酸素の減少が濁りの増加よりイワナに与える影響が大きいことが理解された。

▼苦勞した点・反省点

試験堰堤や溪流の草刈、斜面の整備などの安全を確保することに苦勞した。
 試験堰堤の付近に参加者が集中し、下流の溪流の観察に参加者を自然に誘導することが出来なかった。観察地点の案内等の工夫が必要である。
 イワナの観察は水が濁っているため困難であり、今後、工夫の必要がある。
 土砂出しによる様々な現象が随所で同時に起こっているため、一人で全体を見るのが難しい。観察の後、参加者の観察を総合して整理することが必要である。

▼活動の目的

子供達に沼田川や、そこに生きている水生生物とふれあうことにより環境に対する興味を起こさせ、さらに地元福富町に愛着を持たせる。

総合学習
三原リバーサイド
生涯学習

▼活動の内容

福富町にある、久芳小学校、竹仁小学校の総合学習に協力する形でいっしょに川に入り、水生生物を捕獲し、生態や環境を勉強する。

沼田川下流の源市に源流の町の水生生物を展示することで水環境を考えるきっかけづくりをする。

東広島市の総合学習で沼田川源流の水生生物を展示することで水環境を考えるきっかけづくりをする。

▼活動の効果

同じ町内でも場所が違っていると生活しているさかなや水性昆虫が違うことに気づいた。どうしてそういうことになるかは結論を出さず子供達で考えさせ、後日発表することにした。又、魚を食すことにより、より川に興味を持った。

昔は良く見ていた魚が最近見なくなっていることに改めて気づいたことで水の大切さを考えた(大人)。子供達は水生生物にふれあうことで川に興味を持った。

▼苦勞した点・反省点

天候が悪く、あらかじめ予定していた日に実行出来ず平日開催となったためPTAの参加を見合わせた。

、水環境を考えられる様な配布物を作成しとけば良かった。魚の展示には意外に経費がかかるため、出展を受ける時あらかじめ経費の算出をしておくべきだった。



沼田川(新高山城跡からの眺望): 三原市Website

平成17年度 川に学ぶ活動助成団体 都道府県順一覧表

頁	団体名	都道府県名	河川名等	頁	団体名	都道府県名	河川名等
27	NPO 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ	北海道	幌別来馬川	21	NPO「水の国」しずおかフォーラム	静岡県	安倍川
29	NPO ひがし大雪自然ガイドセンター	北海道	音更川	91	浦都市立中央小学校	愛知県	落合川
38	北海道のカワシジュガイを守る会	北海道	ペベルイ川	95	鈴鹿亀山生活創造圏ビジョン推進会議	三重県	鈴鹿川
11	大曲の水辺に夢をつくらう会	岩手県	北上川	17	鴨と蛸の里づくりグループ	滋賀県	天野川
20	NPO 蕪栗ぬまっこくらぶ	宮城県	小山田川	66	草津塾	滋賀県	葉山川
83	南三陸町立志津川小学校	宮城県	八幡川	3	鴨川を美しくする会	京都府	鴨川
35	出羽乃国漂流隊	山形県	最上川	45	梅津まちづくり委員会	京都府	有栖川
7	美浦村立美浦中学校 科学部	茨城県	霞ヶ浦	85	NPO 流域調整室	京都府	木津川
87	逆川を愛する会	茨城県	逆川	32	エコロジーネットワークOSAKA	大阪府	夢の池
31	余笹川流域連携ネットワーク	栃木県	余笹川	53	狭山の副池自然づくりの会	大阪府	狭山副池
15	半田せせらぎ会	群馬県	利根川	61	川西市情報教育研究会	兵庫県	猪名川
59	ヤマメクラブ	群馬県	雄川	93	自然と文化の森協会	兵庫県	猪名川
37	袖ヶ浦市立中川小学校	千葉県	小櫃川	81	宇陀かわびとの会	奈良県	宇田川
72	海老川の水をきれいにする会	千葉県	海老川	1	馬木っ子ふるさと環境探偵団	島根県	大馬木川
41	川づくり・清瀬の会	東京都	柳瀬川	57	大谷幼稚園ふるさとクラブ	島根県	大谷川
55	せたがや野川の会	東京都	野川	63	でききっくらぶ	岡山県	出崎海岸
67	喜多見ボンボコ会議	東京都	野川	6	尾道市立木頃小学校	広島県	藤井川
69	NPO 多摩川環境研究会	東京都	多摩川	34	三次市立青河小学校	広島県	小似川
22	NPO ふるさと環境市民	神奈川県	目久尻川	89	芦田川環境マネジメントセンター	広島県	芦田川
48	箱根ジュニアエコクラブ	神奈川県	早川	97	すいすい倶楽部	広島県	沼田川
51	和泉川東山の水辺愛護会	神奈川県	和泉川	16	カエルフォーラム	山口県	錦川
23	通船川・栗ノ木川ルネッサンス	新潟県	通船川	79	阿南市立椿小学校	徳島県	椿川
49	長岡市立東中学校	新潟県	信濃川	13	香川淡水魚研究会	香川県	香東川
39	朝日町立五箇庄小学校	富山県	小川	19	香川の水辺を考える会	香川県	有明浜
74	富山県立有磯高等学校	富山県	仏生寺川	65	高松市立檀紙小学校	香川県	香東川
43	小松市立粟津小学校	石川県	日用川	5	野村町環境にやさしい里づくり協議会	愛媛県	黒瀬川
47	NPO エコプラザさばえ	福井県	河和田川	58	八女水の会	福岡県	矢部川
73	河和田自然に親しむ会	福井県	河和田川	9	町田川いやしとにぎわいづくりの会	佐賀県	町田川
28	梓川・奈良井川 水辺の学校	長野県	梓川	75	自然と暮らしを考える研究会	佐賀県	巖木川
33	安曇野市立豊科郷土博物館	長野県	肩川	42	NPO 五ヶ瀬自然学校	宮崎県	五ヶ瀬川
71	NPO 信州いわなの学校	長野県	神川	86	NPO 大淀川流域ネットワーク	宮崎県	大淀川
77	長野ホテルの会	長野県	湯福川	25	薩摩川内市立入来中学校	鹿児島県	樋脇川
96	NPO 山の自然文化研究センター	岐阜県	高原川				



水辺のこゝろ ～平成17年度「川に学ぶ」活動事例集～

平成18年10月 発行

編集発行

財団法人リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8番地 一番町FSビル

TEL:03-3265-7121,FAX:03-3265-7456

「川に学ぶ」活動助成事業事務局 担当:研究第一部 児玉、山木
